被災地における家族の合意形成と
そのフォローアップについて

調査研究報告書

2009 年 3 月

(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
共生社会づくり政策研究群

研究体制

研究責任者	野々山　久　也	共生社会づくり政策研究群研究統括 甲南大学文学部教授
研究会委員	片　岡　佳　美	島根大学法文学部准教授
研究会委員	工　藤　保　則	龍谷大学社会学部准教授
担当研究員（執筆者）	越　智　祐　子	共生社会づくり政策研究群研究員

はじめに－問題の所在と研究の目的 ..... - 1 -

第 1 章　研究の背景 ..... - 2 -

第 1 節　2 つの災害：阪神・淡路大震災と台風 23 号水害 ..... - 2 -
1．　阪神・淡路大震災 ..... - 2 -
2．　台風 23 号水害 ..... - 3 -

第 2 節　「10 年目の検証」以前の研究 ..... - 3 -

第 3 節　「10 年目の検証」 ..... - 8 -
1．　家族関係は「変わらない」という認識 ..... - 8 -
2．　「10 年目検証」の課題：災害時要援護者を含む家族 ..... - 9 -

第 4 節　「家族は変わらない」の理論的検討 ..... - 10 -
1．　「家族ライフスタイルの共同選択過程モデル」 ..... - 10 -
2．　本研究の枠組み ..... - 12 -

第 2 章　方法 ..... - 13 -

第 1 節　インタビュー調査 ..... - 13 -
1．　対象 ..... - 13 -
2．　用具 ..... - 14 -
3．　手続き ..... - 14 -

第 3 章　結果 ..... - 15 -

第 1 節　災害時における、家族ライフスタイルの共同選択 ..... - 15 -
1．　家族は、変化する ..... - 15 -
2．　家族関係は「変わらない」という認識 ..... - 16 -
3．　家族内相互作用 ..... - 17 -

第 2 節　乳幼児がいる家族 ..... - 22 -
1．　パニックになる ..... - 22 -
2．　意思決定を支える家族内相互作用 ..... - 23 -
3．　求められる支援 ..... - 25 -

第 4 章　考察と提言 ..... - 27 -

資料：個別インタビュー要約 ..... - 31 -

○A さん ..... - 31 -

○B さん ..... - 36 -

○C さん ..... - 39 -

○D さん ..... - 41 -

○E さん ..... - 44 -

○F さん ..... - 47 -

○G さん ..... - 51 -

○H さん ..... - 55 -

○I さん ..... - 58 -

○J さん ..... - 61 -

○K さん ..... - 65 -

はじめに－問題の所在と研究の目的

大規模自然災害の被災地において家族は、劇的な変化から生じる諸課題に対応せざるを得なかった。その適応がスムーズにおこなわれるかどうかは、それぞれの家族の意思決定と、環境要因との相互作用によって決まる。

家族の意思決定過程とはすなわち、家族の合意形成のプロセスに他ならない。家族が危機に直面したとき、どのように問題や課題を解決しようとするか、また、状況に適応しようとするかは、当該家族の「統合性（団結性）」ならびに、「適応性（役割分担の柔軟性）」といった要因によって規定される。これまでの研究では、このような家族の災害対応行動を、家族ストレス論や危機介入の枠組みにしたがって、危機対応過程として分析するものが多かった。このため、危機にうまく対処できるかできないか、という臨床的評価がおこなわれがちで、結果として不適応家族に焦点が置かれることになる。また、災害によって、家族を取り巻く生活環境は大きく変化し、後述のように個人の価値観も変化することがわかっているが、このことと家族関係の変化の関係については、必ずしも正面から議論されてこなかった。

以上のことから本研究では、大規模自然災害のような危機に際して、表面上は大きな問題がないようにみえる、「危機になんとか適応してきた家族」に焦点をあてる。被災した家族はそれぞれに、大変な思いをして生活を再構築してきたと考えられる。このような家族は被災地に数多く存在するが、家族への危機介入といった実践的な関心のもとでは、あまり注目されてこなかった。本調査研究の関心は、このような大多数の「なんとか自分たちでやってきた」家族の意思決定過程にある。「なんとか自分たちでやってきた」とは、具体的にはいったいどのようなことなのか、そして、そのプロセスはどう解釈できるのか。家族は、家族集団のまとまり維持のためにどのような自己組織化過程を経験したのだろうか。

本研究は、災害というインパクトを与えられたときの家族の対応過程を、家族ライフスタイルの共同選択過程として考察する。具体的には、自然災害のような大きな変化に直面した家族の居場所の選択、家族内の役割分担、などについて、その意思決定のプロセスを明らかにし、長期的な家族関係について、家族ライフスタイル論的アプローチからフォローすることを目的とする。このことによって、被災時の家族の実態および、長期的な家族関係の変化の実態が明らかとなり、防災先進県として、兵庫県がいま取り組むべき課題を示すことが可能になる。

第1章　研究の背景

ここでは、本調査研究でとりあげる自然災害にふれたあと、「震災と家族，震災 10 年目の検証（以下、単に「10 年目の検証」と記す)」を用いて、先行研究の知見を再整理し、本研究の研究枠組みを示す。

本調査研究の実施主体である(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構の前身のひとつに、家庭問題研究所がある。家庭問題研究所はこれまで、大規模自然災害と家族問題を扱った調査研究を重ねてきており、過去 6 つの関連する調査研究をおこなってきた。タイトルおよび、調査時期と方法は、表 1 に示すとおりである。

表 1 先行研究一覧

no.	調査研究報告書題目	調査時期	方法
1	阪神・淡路大盤災と家族－面接調査による事例研究報告書－	1995年3～4月	インタビュー調査
2	阪神・淡路大袋災が家族に及ぼした影響に関する調査研究報告書	1995年12月	質問紙調査（留置法，自治会やボランティアの協力による配布・回収）
3	阪神一大震災後の消費生活に関する調査研究報告書	1996年10月	①質問紙調査（郵送による配布・回収）、②インタビュー調査
4	仮設住宅におけるコミュニケーション形成への取り組みに関する調査研究報告書	1996年10月	質問紙調査（郵送による配布・回収）
5	阪神・淡路大震災が非被災地に与えた影響に関する調査研究報告書	1996年12月	質問紙調査（郵送による配布・回収）
6	震災と家族、震災10年目の検証－家庭問題研究所の調査研究から－	2005年3月	インタビュー調査

「震災と家族、震災10年目の検証」表2-1より作成

もっとも最初におこなわれた調査研究「阪神・淡路大震災と家族」は、震災発生直後に、被災家族を対象に、被災後の個人生活や家族生活全般についてインタビュー調査を実施したものである。続く 4 つの調査研究は、住宅や消費、コミュニケーションといった、家族問題の諸側面に注目した個別の関心に基づく質問紙調査を用いた研究になっている。震災から 10 年目におこなわれた「震災と家族，震災 10 年目の検証」は、被災後の個人生活や家族生活全般について、過去の調査結果をまとめたうえで、10 年目の検証をおこなうという関心でおこなわれた調査研究であり、一連の調査研究の総括的な役割を担うものとなっている。

第1節　2 つの災害：阪神・淡路大震災と台風 23 号水害

まず、本研究でとりあげる 2 つの自然災害の概要を、国の機関や兵庫県の記述を中心に紹介する。2 つの自然災害とは、兵庫県に大きな被害をもたらした、1995 年に発生した阪神・淡路大震災および、2004 年に発生した台風 23 号による水害である。

1．　阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は、1995 年 1 月 17 日火曜日の午前 5 時 46 分に発生した、マグニチュード 7.3 の都市直下型地震であり、震源地は淡路島北部、震源の深さは 16km である。一部で震度 7 を記録する、未曾有の大地震であった。地震による死者は、兵庫県で 6402 人（全国で 6434 人)、負傷者は、重軽傷あわせて兵庫県で 40092 人（同 43792 人）を数える。住家の被害は、全壊に限っても、104004 棟（同 104906 棟）にのぼる。

被害の特徴は 3 点挙げられている。1 点目は、都市直下型の地震であったため、ライフライン（電気・ガス・水道）や都市間交通網などの、都市機能が広範囲にわたって停止し、復旧までに相当の時間を要したこと。2 点目に、古い木造家屋の密集地域において、家屋の倒壊や大規模火災が集中的に発生したこと。そして 3 点目に、被災地に阪神間という人

口集中地が含まれていたため、非常に多くの人びとが避難生活を送ったこと、である（http://web.pref.hyogo.lg.jp/pa17/pa17_000000001.html）。

２．　台風 23 号水害

台風 23 号は、2004 年 10 月に発生した台風で、同 20 日に兵庫県を通過した。この台風被害の特徴は、各地で極値を更新するなど、台風自体が大型で強いものであったことに加え、2004 年に、集中豪雨や台風が複数回発生していたことである。その影響は、九州から東日本にかけて広範囲にわたる大きなものとなり、激甚災害の指定がなされた。兵庫県では、但馬、北播磨、淡路等で河川の破堤や越水が生じ、広範囲に浸水被害が発生した。被害については、死者 26 人（全国で 95 人）、負傷者は、重軽傷あわせて兵庫県で 134 人（同 552 人）であった。住家の被害は、全壊は 737 棟（同 893 棟）であり、床上、床下あわせて、浸水被害は 10757 棟（同 55558 棟）にのぼる（http://www.bousai.go.jp/fsg/download/fsg09.pdf）。

第2節　「10 年目の検証」以前の研究

「10 年目の検証」は、「阪神・淡路大震災と家族」から「阪神・淡路大震災が非被災地に与えた影響」までの 5 つの調査研究から得られた知見を、研究単位で要約し、合計 66 項目を挙げている。66 項目の一覧を表 2 に示す。

本研究では、被災地に焦点化するため、得られた 66 項目の知見のうち、「阪神・淡路大震災が非被災地に与えた影響」をのぞく 4 つの研究から得られた 55 項目について、12 カテゴリに分類した。結果は、図 1 に示すとおりである。

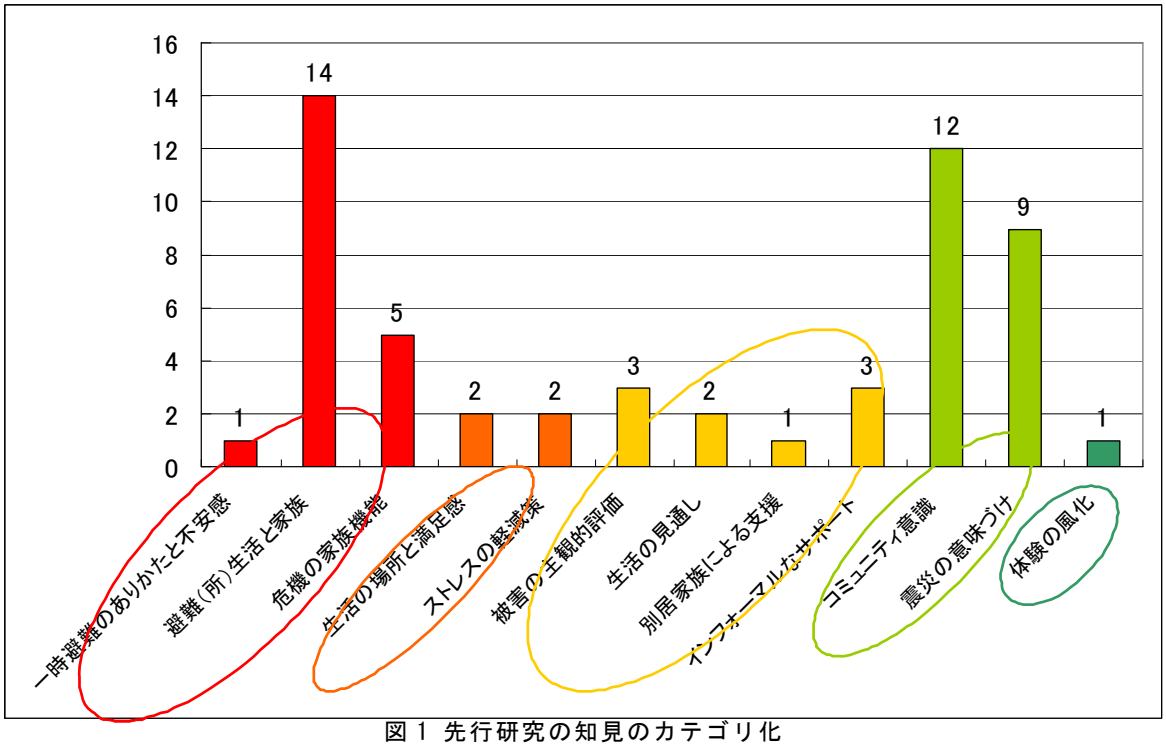


図 1 先行研究の知見のカテゴリ化

「一時避難のありかたと不安感」「避難（所）生活と家族」「危機の家族機能」は、震災

直後の避難行動から、避難所での応急一次避難生活における、家族についての知見である。ここでは、被災した家族がどのような生活を送り、どのようにふるまうのかが示されている。例えば、避難所への移動が家族一緒でなかった場合、不安が大きくなることがある。家族メンバーに、障害者や子どもなどの特別な配慮を必要とする人がいる場合、家族は指定避難所での生活を断念することがある。あるいは、家族メンバーからプライバシー確保の要求が出された場合、その家族は、一次避難所での生活を終結させ、より恒久的な生活場所（住宅）を選択する必要に迫られることがある。また、被災直後の家族が、家族の今後の生活について考え始めるのに必要なことは、ダンボールで仕切ったり、家族員同士でお互いを思いやる行動で示すなど、家族の境界線を物理的ないし精神的に表現することである、といった内容となっている。合計 20 項目を、ここに分類した。

「生活の場所と満足感」「ストレスの軽減策」は、応急的な避難から少し時間が経過した、仮設住宅や自宅での、生活満足感やストレスに関する知見である。例えば、仮設住宅に入居した人は、自宅に戻った人よりも有意にストレスや生活満足感が低い、といったことや、自由時間が確保されていることは、ストレスの軽減に関連があることなどが含まれる。合計 4 項目をここに分類した。

「被害の主観的評価」「生活の見通し」「別居家族による支援」「インフォーマルなサポート」は、被災程度と得られた支援の主観的評価と、今後の生活の見通しに関連する知見である。例えば、実際の被災程度に関係なく、重大な被害だと主観的に受けとめられている場合は、ストレスが高い。友人・知人や同居以外の親族からのサポートは、不安感の軽減と関連する、といった内容が含まれる。ここには合計 9 項目を分類した。

「コミュニティ意識」「震災の意味づけ」は、仮設住宅での、同居家族以外の住民とのコミュニケーションのありようや、震災が個人の価値観や家政（住居の選択や家計の配分など）に与えた影響についてのラベルである。例えば、仮設住宅では、近隣とざっくばらんなコミュニケーションがとれていると考えている人が多い。一方で、近所とはいえプライベートな部分への介入に対して拒否的な意見も多い。価値観については、ものを多く持つことへの志向が低くなったことや、自分のものは要らないと思うようになった、といった、震災を体験したことによって価値観が変化したことが報告されている。ここには、合計 21 項目を分類した。

最後に、「体験の風化」が挙げられる。これは、震災直後はみんなやさしかったのに、人間関係がぎすぎすしてきていることについて、自戒をこめて指摘した内容となっている。

以上の知見は、すべて震災発生から 2 年以内の調査で得られたものである。このため、応急対応である、避難（所）生活に関する内容がもっとも多くなっている。避難（所）生活とは、一時的な仮住まいで家族はどのように生活するのかであると同時に、災害発生時という危機的な状況下で、家族はどのようにふるまうのか、ということでもある。これらは、個人や家族の具体的な生活という、インフォーマルで詳細なことがらに関する知見である。これに対して、「コミュニティ意識」「震災の意味づけ」では、震災はすでに「体験」として位置づけられつつある。これらは、震災後に新しく見直された価値に関するものであり、対社会的なことがらに関する知見であるといえる。

本研究では、以上の知見について、とくに家族内の合意形成や意思決定過程に注目し、□2004 年に発生した、台風 23 号水害においても妥当するかどうか、□震災から 14 年が経

過して、被災地の家族は今、震災をどのように意味づけているのか、という関心から検討する。

表 2 先行研究の知見（項目）

1_1	● 避難所まで一人で移動しなければならなかった人は，家族で移動した人に比べ，孤独や不安に悩みやすい。
1_2	● 避難所まで複数の家族（親族や近隣の家族）で移動してきた人たちは，ストレスがより小さい。ただし，複数の家族でまとまっての避難所生活が成立するのは，普段からの親密なつき合いや家族間紐帯の強さを確認させるシンボルの共有（e. g. ，「お地蔵様」，「寝たきりのお父さん」）が前提。
1_3	● 避難所生活を送るなかで精神的に不安定な状態にある家族成員が出てくると，他の家族成員も不安になっていく。
1_4	● 家族の中に障害者や子どもなどがいると，周囲に迷惑がかかるなどの懸念から避難所生活がストレスフルなものになる。子どもが就学前であれば，避難所生活を避け，母親と子どもだけでも親戚宅などの落ち着いて暮らせるところに身を寄せるようにしているケースもあった。
1_5	● 避難所では，他人に迷惑をかけてはいけないというプレッシャーがあり，逸脱行動や自己主張が自制されるため，家族集団の統率，そして避難所全体の統率が保たれやすい。ただし，それは初期について言えることで，避難所生活が3か月も経過すると次第に葛藤や苛立ちが募ってくる。
1_6	● 避難所生活での不満や抑えてきた自己欲求がためておけなくなると，家族は避難所から離れ自立した生活を築くことを急ぐようになる。
1_7	●避難所では家族は，ボランティアの助けに依存するところが大きく，他の避難家族と協力しあって何かをするということはほとんどない。むしろ家族は，自分たち家族の外と内の境界線をいっそう厳密に引くことに力を注ぐ（たとえば，隣りに寝る家族とのあいだの仕切代わりの荷物や折りたたんで立てた段ボール）。
1_8	● 家族がその内外の境界を維持し凝集性を高めることは（段ボールを立てるなど物理的境界を守ることのほか，家族成員どうしが互いに思いやり情緒的な結合を高めることも含む），家族がこれから先どうするかについて考え始めるのに必要な条件。
1_9	● 家族にとって避難所は生活の場というよりは食べて寝るだけのところとなるほうが気楽である。昼間は倒壊した家の片づけなどのために外に出て行くことがストレス発散になる。
1_10	● 物資などフォーマルなサポートは行政が提供し，情緒面でのケアなどインフォーマルなサポートは，農村部では親族や近隣の人たちによって提供され 都市部ではボランティアが頼られる。しかしボランティアは普段からよく知っている人たちではないので，家族の中に入り込むことが難しく，そのぶん葛藤や衝突も生じやすくなる。
1_11	● 避難所の被災者リーダーに対し「あんたらは行政の味方か」と被災者から文句が出て，避難所本部が解散した。避難所にいる人のなかで炊き出しボランティアを募ったが集まらなかった。自分のお金を使いたくないという理由で，避難所に泊まっていないのに，お弁当だけ取りに来る人も少なくなかった。支援してもらおうという依存心。
1_12	● 思春期・青年期の女性は，プライバシー侵害に敏感で，避難所生活がとくに苦痛になる。そのような年代の娘がいる家族では，避難所を出て自立した生活を早く始めるよう家族内からの圧力がかかる。
1_13	● 中高年家族では男性のリーダーシップが，若年家族ではリーダー役割の柔軟な代替が，ストレスの減少に効果的。道具的リーダー／表出的リーダーのどちらについてもそう言える。 ※道具的リーダー・表出的リーダー→アメリカの社会学者Tパーソンズの用語。集団が問題を解決するための手段・方法を外から集めてきて集団に提供することに貢献するリーダーを道具的リーダーという。集団内の緊張をときほぐし集団のメンバーたちが問題解決に向かってすすめるよう統合に努めるリーダーを表出的リーダーという。「男は外，女は内」という性別役割分業は，「男性＝道具的リーダー，女性＝表出的リーダー」ということを意味する。
1_14	● 若い世代においてはとくに，親元であっても他人の家であるという意識が強く，そのため実家に避難した家族は気をつかいストレスをためる傾向がある。また，実家側も，仕方がないことだと思いつつも普段と違う生活にストレスを感じる。
1_15	● 新婚期家族（結婚後，年数が浅く，子どもがいない時期の家族）の場合，震災は夫婦の絆を強めたと認識されている。夫婦二人だけの世界から，震災によって，互いの実家や近隣，職場といった外の世界との関わりが深まったことが大きく影響している。
1_16	● 養育期・教育期豪族（乳幼児，または就学する子どもがいる時期の家族）の場合，親は子どもの存在を励みに災害で受けたストレスを克服しようとする傾向がある。
1_17	● 排出期家族（子どもが就職あるいは結婚して独立しつつある時期の家族）の場合，被災が今後の自分たちの人生について考えるきっかけになっている。第二の人生としてやり直すという希望につながっていることもある。
1_18	● 老年期家族（おおよそ65歳を超えた時期の家族）の場合，先があまりないという思いから，被災による人・モノの喪失がとくに絶望的なものになりやすい。しかし高齢者のなかには，被災体験を「人生の一コマにすぎない」と達観する人もある。若い世代に比べ，高齢者は被災体験を自分の人生の中にどう位置づけるかが問題になっている。
2_1	● 地震時の世帯構成は，一人暮らしは残存住宅居住者では1割に満たないが，仮設住宅居住者では3割を占める。夫婦のみ世帯は残存住宅居住者では2割，仮設住宅居住者は3割。
2_2	● 避難のため家族と分離したケースで，今も離れているという人は残存住宅居住者で1割，仮設住宅居住者で2割。避難により離れた家族成員で多いのは未婚の子どもと配偶者で，残存・仮設住宅居住者とも約4割を占める。
2_3	● 避難先は，残存住宅居住者では夫または妻の実家がもっとも多く半数を占めるが，仮設住宅居住者では避難所がもっとも多く半数を占める。
2_4	● 避難先の選択理由は，残存住宅居住者では安全性が6割の人にあげられたのに対し，仮設住宅居住者では安全性は4割の回答で，それよりも「他にない」という回答が多く5割を占めた。
2_5	● 親戚，友人・知人，近隣の人といった身近な人から支援を多く受けているほど，家族の現在の生活がうまくいっていると回答されている。仮設住宅居住者のうち親と既婚子（と既婚子の子）からなる世帯では，一人暮らし世帯，夫婦のみ世帯，親と未婚子からなる世帯に比べて，身近な支援が役立たなかったとされている。
2_6	● 家族生活の現状について，家族内・外の人間関係，親子間の問題，日常的な家族生活の運営，プライベート生活の確保のそれぞれで，仮設住宅居住者では残存住宅居住者よりもうまくいっていないと感じられている。
2_7	● ストレスを測るための日本版GHQ（General Health Questionaire）をもとに作成された身体的症状・不安と不眠・社会的活動障害の3尺度の得点を仮設住宅居住者と残存住宅居住者で比較したところ，前者のほうがすべての尺度において平均値が高く，ストレスが大きいことが分かる。
2_8	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，避難によって家族が離散したままの場合，ストレスがもっとも大きい。
2_9	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，自分の自由時間の確保についてどのくらいうまくいっているかということと，ストレスは非常に大きな相関がある。
2_10	● よその家と比べた自分たちの家の地震の打撃については，「非常に大きな打撃」と認知する割合が仮設住宅居住者では36. 0%，残存住宅居住者では10. 6%である。
2_11	● 地震の打撃の認知に関する変数の影響を取り除くと，家屋の被災程度とストレスのあいだの相関は有意でなくなる。ただし，仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，地震の打撃の認知に関する変数の影響を制御しても，収入や家族の分離とストレスの相関は有意である。
2_12	● 地震の打撃の認知に関する変数の影響を取り除くと，家屋の被害程度と今後の生活の見通しのあいだの相関は有意でなくなる。ただし，仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，地震の打撃の認知に関する変数の影響を制御しても，収入と今後の生活の見通しの相関は有意である。
2_13	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，住んでいる地域への愛着は強いが，地域行事に出費することには躊躇する人が多い。神戸以外のよその土地で生活することは考えられないという意見に肯定する割合は，仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに約8割。お祭りなど地域行事に出費もいとわないという意見に否定する割合は，仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに約6割。
2_14	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，地域活動は当然だとされており（ともに9割以上），福祉活動子どもの教育のそれぞれを地域で行なうという意見に肯定する割合は仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに約8割。
2_15	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，約7割が，勤めていても地域活動に参加すべきだという意見に肯定的。

出所：「震災と家族，震災 10 年目の検証」

表 2（続き） 先行研究の知見（項目）

2_16	● 仮設住宅居住者，残存住宅居住者ともに，約7割が，地域活動を自己表現の場と捉えている。
2_17	● 一方で，仮設住宅居住者 残存住宅居住者ともに，近隣でもプライバシーに介入しないのがルールだという意見に肯定的な割合が約9割ある。
3_1	● 家屋や家財の被害程度が大きいほど，消費行動は大きく変わったとされている。とくに変化した消費は，家具，衣料品である。食料品や日用品の消費は，家屋の被災程度に関係なく変化したとされている。家屋・家財の被害程度の変数をコントロールしても，消費財の使い方における変化と年齢とのあいだには相関がある。すなわち，年齢が高くなるほど，長い間使わずにしまってあったものを使うようになった，新製品が出てもすぐ買い換えるようなことはなくなったという。
3_2	● 貯蓄するよりは消費を楽しみたいという人は2割ほどだが，買い物はストレス発散，特に購入するものがなくても百貨店に行きたいといった意見はそれぞれ58.8%，49.6%が肯定。消費行動はたんにモノを得るだけでなく，精神的な面での充実も得られるということ。
3_3	● 家財はできるだけ少ないほうがいいという意見に肯定的な人は9割にのぼる。衣料，家具，家電，食品についてはよいものなら高くてもかまわないという意見に肯定的な人はそれぞれ半数以上ある。選好は，シンプルだが安上がりというわけではない。
3_4	● 貸賃住宅志向は，現在の住居が賃貸である場合に強くみられる。現在持ち家に住む人においても1割ほどは賃貸住宅のほうがいいというが，これについては家屋や家財の被害程度との相関はみられない。
3_5	● 高齢・退職のためローンが組めず，家屋再建については退職金とそれまでの貯蓄を全部使って行なっている。再建による借金はないが，老後生活に大きな不安をもたらしている。
3_6	● 自分のモノはほしいと思わなくなった。しかし，子どもや震災のせいで身体が不自由になった義母など，他の家族成員や親族のためのモノはほしいと思う。その点では支出を減らすことはできないという。
3_7	● 子どもがいないケースでは，地震保険などにも関心がなく，地震については「来るなら来い」という気持ちになっている。また災害にあえば，もうそれでそのまま死んでもいいという。一方，子どものいるケースでは，今でも災害の備えとして水を用意するなど気をつかっている。
3_8	● 被災時はみんな優しかったのに，だんだんとそれが忘れられてきて，人間関係がぎすぎすし出したという。自分も反省しているという。
4_1	● 仮設住宅団地については「庶民的でうちとける」「よく相談し助け合う」といった肯定的な意見が多数派を占める。とくに小規模でも大規模でもなく中規模の仮設住宅団地の場合，そうした傾向が強い。
4_2	● 仮設住宅団地内の近隣関係については「まあ満足している」がもっとも多く約6割を占める。「非常に満足している」と合わせると約8割が満足。仮設住宅団地の規模別にみると，中規模がもっとも満足度が高い。
4_3	● 回答者の年代別に仮設住宅団地内の近隣関係についての満足度を比較すると，高齢であるほど満足度が高い。
4_4	● 仮設住宅団地内にある自治会やふれあいセンターの活動には，参加している人が6割以上ある。ただし若い世代では参加率が低い。
4_5	● 自治会・ふれあいセンターの活動への参加は，仮設住宅団地の規模別にみると中規模がもっとも高い。大規模では低い。
4_6	● 自治会・ふれあいセンターの運営について「うまくいっている」という回答は，中規模の仮設住宅団地でもっとも多い。
4_7	● 情緒的なサポート，実際的なサポートともに，行政やボランティアよりも親族や友人からのサポートが役立ったとされている。近隣のサポートはその中間に役立ったとされている。
4_8	● 仮設住宅から転居後の近所づきあいについて，4割が「堅苦しくなく話し合う」ことを，2割が「何でも相談・助け合う」ことを希望している。
4_9	● 現在仮設住宅内で人付き合いがある人ほど，転居後の近所づきあいについて親密さを望んでいる。
4_10	● 転居後の近所づきあいは，9割が必要としている（「とても必要」＋「どちらかといえば必要」）。高齢になるほど強く必要とされる。
4_11	● しかし転居後の近所づきあいについて「積極的に参加」は1割程度。「時間に余裕があれば」が4割，「できることがわからない」が約3割。
4_12	● 近所づきあいにおける問題についての自由記述では，自治会・ふれあいセンターに関するものが15%を占めた。自治会会長や役員の態度，会計監査，派閥問題など主催者側の問題が多く指摘されている。参加者がいつも決まっているため参加しにくい，高齢者ばかりが優先されるといった不満も。近所の人のマナー違反についての言及も15%ほどあった。
5_1	● 被災地に親戚がいた場合，非被災者のほうから積極的に安否確認が行なわれる。親戚との関係は希薄になったとはいえ，震災当日から3日以内に約7割が安否確認のため連絡をとっている。安否確認の手段は約8割が電話。「直接出向いて」は0%。
5_2	● 現在はどうであれ，震災をきっかけに豪族の絆を重視するようになったという非被災者は12．2%，親族との関わりを重視するようになったという非被災者は15．0%，地域の人びととの関わりを重視するようになったという非被災者は29．4%。震災が与えた地域関係へのインパクトは大きい。
5_3	● 震災後家族の絆を重視するようになったとしても，それは家族の個人化の流れに逆行するものではない。各自が好きなことをできる一方で心の支えとなるという関係が支持されている。
5_4	● 被災地に対して何らかの支援を行なった非被災者においては，震災以来家族の絆を重視するようになったという割合がより大きい。
5_5	● 虚災後親族との関わりを重視するようになった非被災者は，それは家族同様に緊密な関係ではなく，何かあったときだけ距離を縮めるような関係を選好している。それに対し，震災前から親族との関わりを重視している非被災者は，豪族同様の親しい関係を選好する。
5_6	● 世帯年収が低いところでは震災後親族との関わりを重視している割合がより大きい。また，震災前後関係なく親族との関わりを重視しないという割合も，世帯年収が低いところではより大きい。
5_7	● 震災後地域の人びととの関わりを重視するようになった非被災者は，それは家族同様に緊密な関係ではなく，何かあったときだけ距離を縮めるような関係を選好している。それに対し，震災前から地域の人びととの関わりを重視している非被災者は，家族同様の親しい関係を選好する。
5_8	● 年齢が高くなるほど，震災後地域の人びととの関わりを重視するようになったという割合が大きくなる。
5_9	● 地域の人びとと関わりをもちたくないという非被災者は，心配ごとの相談相手や金銭援助の相手がだれもいない（だれともしない）という割合がより大きい。
5_10	● 万一自宅が倒壊し住めなくなったときだれに頼るかについてたずねた結果，別世帯の親や子が36．5%，次いで公的機関が20．5%と多い。公的機関を頼る非被災者は，人間関係に煩わされずに済む，親しい人がいない，ということを理由にあげている。
5_11	● 8割ほどの非被災者が防災対策は行政任せでなく地域住民の連携が必要と考えており，そうした意識は日頃から災害への備えができている非被災者はど多くみられる。

出所：「震災と家族，震災 10 年目の検証」

第3節　「10 年目の検証」

2004 年度におこなわれた「10 年目の検証」では、震災後 10 年を経た家族へのインタビュー調査をとおして、被災体験と家族関係について考察をおこなっている。その内容は、□家族関係に対する被災の影響は長期的には小さいと認識されている、□家族の存在は、そのメンバーである個人にとって大きな励ましとなる、□危機を乗り越える家族関係は、お互いを縛るものとしてではなく、自立した個人同士を結びつけるものとして機能している（「ほだし」ではなく、「きずな」)、□「震災体験をどのように語るか」は、なおも語る個人によって模索されているが、総じて「家族を含む、自分以外の他者との連帯の重要性を再認識した体験」として語られる、の 4 点に要約できる。

「10 年目の検証」は、「個人の自由意思が、合意形成の過程を経て『家族ライフスタイル』を形成する、という立場から、物理的・心理的に極限の制約条件のなかで、個人の「自由」と他者の「自由」とのバランスをとることの重要性が再認識された、と結論している。ここでは、個人の自由と他者との連帯は二律背反ではなく両立しうることが、事例をとおして語られているといえる。

１．　家族関係は「変わらない」という認識

「10 年目の検証」で指摘されているのは、震災を経験しても家族関係は変わらない、と認識されている場合も多い、ということである。短期的に生活が激変し、中長期的な人生設計が変化したケースが少なくないにもかかわらず、「変化していない」と認識されているのは、なぜだろうか。

「家族関係が変化した」と認識される事例をみてみよう。「10 年目の検証」では、災害直後の、夫による家族を省みない言動に接して離婚を決意した女性のケースや、地震で住居と財産を失ってから、独立していた子どもとの交流が減ってしまい「子どもはいないもの」と考えるに至ったケースが紹介されている。被災前までの役割遂行がメンバーに期待できなくなった、あるいは合意がとれなくなった結果、婚姻の廃止や、お互いの家の行き来や電話でのやりとり等の一切の接触を持たない、といったように、家族関係が悪化し、家族ライフスタイルが変化している。逆に言えば、家族関係が良好なとき、すなわち被災後も、合意が維持ないしは再構築され安定した家族ライフスタイルを持てる場合に、「変わらない」と語られると考えてよい。

個人の変化については、前節「10 年目の検証」以前の研究で見たように、震災を経験したことによって、個人の価値観の変化が指摘されている。「10 年目の検証」でも、震災時に避難所運営に従事した経験から、地域活動に関心を持つようになった事例が紹介されている。このケースでは、妻によって「(夫は）人間が変わった」と表現されている一方で、「夫個人は変わっても、夫婦関係をはじめとする家族関係は変わらない」、とも表現されている。このことは、個人の価値観や行動の変化は、家族関係の変化に必ずしも直結しない、ということを表している。それでは、個人の変化と家族ライフスタイルの変化のあいだには、どのような過程が存在しているのであろうか。

２．　「10 年目検証」の課題：災害時要援護者を含む家族

「10 年目の検証」で、今後の検討課題としてあげられたもののひとつに、災害時要援護者支援がある。「10 年目の検証」は、極限の制約条件のなかで、個人の「自由」と他者の「自由」とのバランスをとることの重要性が再認識された、と指摘している。これは、個人がライフスタイルを選択する際に、必ず他者との相互作用を必要とすること、そのことは日頃あまり意識されていないが、極限状態では重要な課題として認識されることになる、という意味である。しかしこれまでの検証では、個人の選好の意思表示等に支援が必要な、災害時要援護者を成員に持つ家族の合意形成過程については、具体的に扱ってこなかった。

災害時要援護者とは、内閣府の定義によれば「必要な情報を迅速かつ的確に把握し、災害から自らを守るために安全な場所に避難するなどの災害時の一連の行動をとるのに支援を要する人々」であり、一般的に高齢者、障害者、外国人、乳幼児、妊婦等が想定される（内閣府 2007）。このように定義されていると、「災害時要援護者」があたかもそれ単体で存在しているかのようにも思えるが、実際には「災害時要援護者」は複数の社会関係のなかに埋め込まれており、被災程度と社会関係のありようによって、その支援の必要性の程度や内容が決まる。

ところで、支援対象としてまず想定されるのは、要介護や独居等の状態にある高齢者層である。要介護高齢者については、介護の社会化がすすんでおり、「介護の大変さ」は周知されている。独居や高齢のみ世帯等の高齢者についても、平時から複数の支援策の対象になっている。このような理由から、家族関係をはじめとする社会関係のありようについてその如何を問うことなしに、要援護者単体を想定した課題として設定されがちであると考えられる。

乳幼児については高齢者の場合と異なり、養育することおよび、養育者の存在があたりまえとみなされている。母親が孤独に育児に取り組むことの弊害が指摘され、「地域での子育て」が推奨されてはいるものの、現実には育児の社会化は高齢者介護のようにはすすんでおらず、通常は、養育者がマネジメントの全責任をもつという社会関係の存在が当然視されている。したがって、災害時の援護について、乳幼児単体の課題として取りあげられることはない。

しかし、「災害時要援護者」は「新しい環境への適応能力が不十分であるため、災害による住環境の変化への対応や、避難行動、避難所での生活に困難を来すが、必要なときに必要な支援が適切に受けられれば自立した生活を送ることが可能」な存在である（内閣府 2007）。災害時要援護者となりうる人が「支援を受ける」ということはすなわち、「支援する」人がいるということである。災害による環境の変化は、支援を提供する側にもされる側にも当然影響を与える。たとえば、災害発生前後で乳幼児の心身状態に格段の変化はなくとも、養育者がこれまでどおりの養育ができない状況に置かれることがある。したがって、「援護の対象」は厳密に言えばあくまでも乳幼児であるが、対象者をとりまく社会関係、とくに同居家族や近隣住民を視野に入れた支援こそが現実的である。

本調査研究ではとくに、多胎児に注目する。多胎は 100 の出産に 1 組程度の確率で発生する事象であるが、不妊治療技術の発達にともなって、わが国では近年増加傾向にある（大木 2007）。多胎育児の困難さは、多くの側面で指摘されている。妊娠・出産にともなう医学的なリスクの高さや、養育にかかる技術的な難しさだけでなく、周囲の人たちからその

困難をなかなか理解されないという、社会的困難も存在する（越智ほか 2009）。ひとりずつの赤ちゃんの個体差を含めて、養育にかかる諸条件は単胎の場合と決定的に異なることはそう多くないが、「同時にふたり以上」という条件が、複雑性を増幅させる。

乳幼児、なかでも多胎児（ふたごやみつご）を抱えた家族が、災害時にどのような体験をするのか、必要な社会的支援はあるのか、あるとすればそれはなにか、という問いはこれまで、積極的に検討されてこなかった。そこで本研究では、主として台風 23 号水害を題材に、多胎児をその成員に含む家族の合意形成過程について検討する。

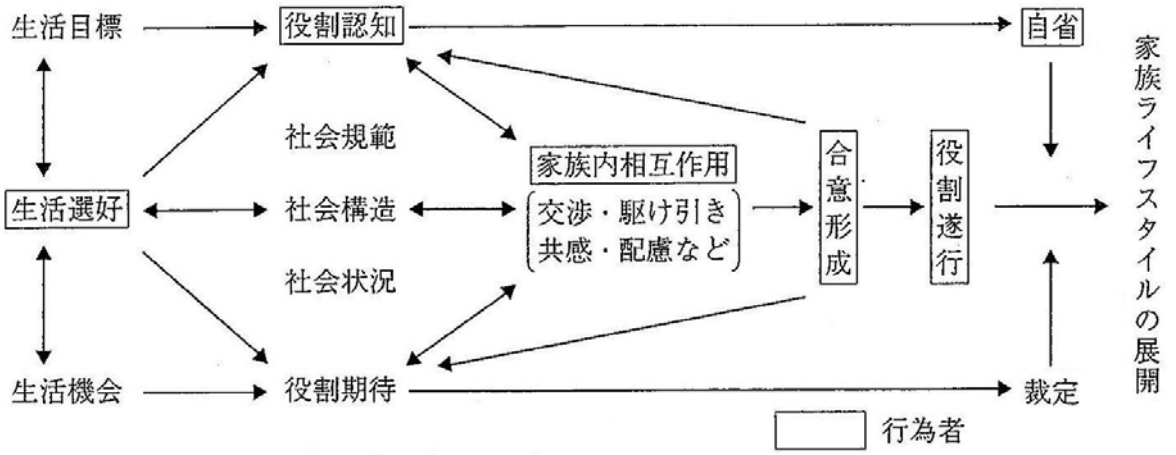
第4節　「家族は変わらない」の理論的検討

本節では、これまでみてきた「個人の価値観や生活環境が変化しても、家族関係は変化しない、と認識されるのはなぜか」という問いを、「家族ライフスタイルの共同選択過程モデル」を用いて検討する。さらに、「家族ライフスタイルの共同選択過程モデル」を災害発生時に適用する本研究の枠組みについて述べる。

1．　「家族ライフスタイルの共同選択過程モデル」

ここでは、「家族ライフスタイルの共同選択過程モデル」（野々山 2007）を用いて、災害を経験した家族の合意形成過程を整理する。

野々山久也は、家族のとらえかたを「制度としての家族」「集団としての家族」「ライフスタイルとしての家族」という 3 側面に整理したうえで、現代の日本における家族は「ライフスタイルとしての家族」という視角から分析することが有効である、とする。そして、家族がそのライフスタイルを選択する過程を図 2 のように図式化している（野々山 2007）。



出所：『現代家族のパラダイム革新―直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』

図 2 家族ライフスタイルの共同選択の過程

このモデルでは、「生活目標」や「生活機会」と相互に関連する、個人の「生活選好」が入力変数となっている。家族ライフスタイルの選択過程は、図の左から右への流れとして表現されており、「役割遂行」を出力するまでに、「役割認知」「家族内相互作用」と「合意形成」という過程が想定されている。さらにこのプロセスは、行為者の「自省」と家族員の「裁定」による調整を経て、「家族ライフスタイルの展開」に至る。このモデルの特徴

は「家族内相互作用」が、個人の「生活選好」と同様に重視されているところにある。「家族内相互作用」は、共感や配慮をコミュニケーションによって示す過程であり、交渉や駆け引きをも含んでいる（野々山 2007）。

先に、災害のような危機に際した家族は、物心両面における極限の制約条件のなかで、個人の「自由」と他者の「自由」とのバランスをとることの重要性を再認識する、という知見を紹介した。以下では、このことを「家族ライフスタイルの共同選択」という文脈で整理し直したい。

まず、大規模自然災害は、「生活機会」という、個人レベルの環境要因を変化させると同時に、一時的にせよ「社会規範」や「社会状況」といった、広範囲の環境要因をも劇的に変化させる。被災者は、日常とはまったく異なる生活機会におかれ、「みんながなにももたない『災害ユートピア（土岐他 2005）』」が成立する。ここでは、日常の社会規範や社会状況はちからを持っていない。このため、個人の「生活選好」も、当然影響を受けると考えられる。入力変数である「生活選好」のとる値が変化すれば、後の全過程での変化が予測される。被災によって家族関係が変化することは、家族ライフスタイルの共同選択過程に即して以上のように説明できる。

しかし先に見たように、個人の変化の有無にかかわらず家族は変化しない、と認識されている場合もある。このとき、家族ライフスタイルの安定に寄与するのは、どの要素なのだろうか。言い換えれば、被災により、環境要因である「生活機会」や「社会状況」等は変化するが、その変化は「役割遂行」には影響を与えない、というモデルを想定したとき、影響の緩和はどの要素が担当しているのだろうか。

図にみるように、「合意形成」に影響を与えるのは「家族内相互作用」である。この「家族内相互作用」は、行為者個人の「役割認知」、家族員からの「役割期待」、そして広範囲の環境要因である「社会規範」「社会構造」「社会状況」のすべての領域の要因と、相互に影響を与えあっている。つまり「家族内相互作用」は、一方的な作用なのではなく、内外の要因とのあいだに起こる、きわめて動的な相互作用過程であると考えることができる。表 2 の（1_8）に、「お互いを思いやっていることを示す等の、家族の凝集性を高める行動は、家族が今後のことを考え始める条件」とあるように、家族は日頃よりも、より「共感」「配慮」を使った相互作用をおこなうことで、家族関係を安定させると考えられる。

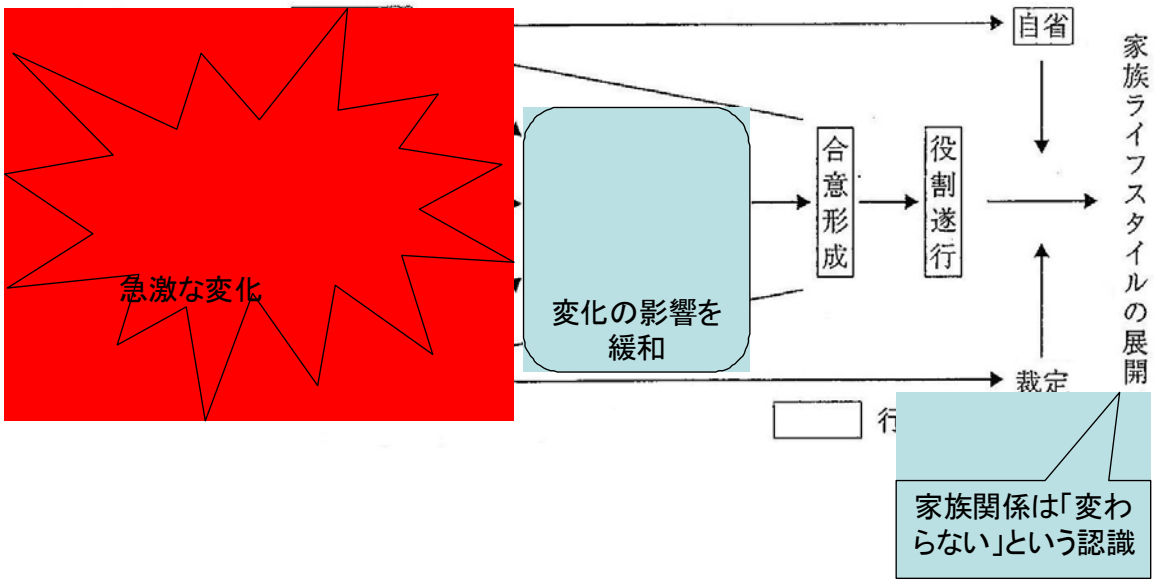
このことから、「災害のような危機に際した家族は、物心両面における極限の制約条件のなかで、個人の『自由』と他者の『自由』とのバランスをとることの重要性を再認識する」とは、次のことであると見なすことができる。すなわち、災害のような危機に際した家族は、「生活機会」だけでなく「社会規範」や「社会状況」をも含む劇的な環境要因の変化を経験する。このとき家族は、個人の「自由」や「生活選好」だけでなく、他者の「自由」や「生活選好」に共感や配慮のできる、柔軟な「家族内相互作用」を重要視する。

２．　　本研究の枠組み

前項から、災害時における「家族ライフスタイル共同選択過程」は、図＊のように表現できる。

ここから、「災害を経験した家族は、日常よりも共感や配慮をより多く用いた『家族内相互作用』をおこなうことで、変化の影響を緩和させ、家族ライフスタイルを安定させる」という仮説が導かれる。

本研究は、先行研究を理論的に検討することで導かれた上記の仮説について、災害を体験した個人の語りを用いて検証するものである。



出所：『現代家族のパラダイム革新―直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』を改変

図 3 災害時の家族ライフスタイルの共同選択過程（仮説）

第2章　方法

第1節　インタビュー調査

1．　対象

対象は、大規模自然災害の被災経験を持つ個人である。全員が、被災当時家族と同居していた（現在は、一人暮らしとなっている人もいる）。具体的には、兵庫県が近年経験した大規模自然災害である、阪神・淡路大震災（1995 年）および台風 23 号水害（2004 年）のいずれかを経験した個人を対象とした。つまり、被災体験や家族について、個人の視点から語ってもらうことになる。このため、家族についての語りでは、「語り手の主観」というバイアスがかかっていることに留意する必要がある。

対象者の選定は、次のとおりおこなった。すなわち、人と防災未来センターの震災体験語り部ボランティア、（財）阪神・淡路大震災記念協会（当時）が作成した「市民が撮った震災映像アーカイブ」への映像データ寄託者、多胎育児支援サークル関係者からの紹介および、家庭問題研究所が過去におこなったインタビュー調査のインフォーマント、に対してそれぞれ、インタビュー調査への協力を依頼し承諾を得た。調査時期は、2008 年 8 月から 2009 年 2 月である。対象者の一覧を表 3 に示す。

表 3 インタビュー調査協力者一覧

	被災年	被災当時の年齢	地域	家屋被害	人的被害	当時の家族構成	概要
A	1995	40代	西宮	家の中がめちゃくちゃ（マンション）	ケガ	本人・妻・長女（小4）	放送局勤務。日頃は「亭主関白」だが、震災当日は家族の反対にあい、出社できず。
B	1995	45	宝塚	家の中がめちゃくちゃ（戸建）	なし	本人・夫・長女（17）・長男・次男（7）	震災映像寄託者。夫の母を在宅介護で看送ってまもなく被災。家族の役割分担は臨機応変にかわる。家族仲はいいが、べたべたした感じではない、と語る。
C	1995	30代	神戸市	被害なし	なし	本人・夫・長男（小3）・長女・ふたご（男・男）・5番目（8ヶ月）	ライフライン停止中、水を提供してくれたボランティアに感銘を受け、生後8ヶ月の子を抱えてボランティア活動を開始。
D	1995	61	神戸市	全壊（戸建）	本人はクラッシュ症候群。息子さんが死亡	本人・長男（29）	語り部ボランティア。自宅が全壊し、下敷きになる。救出されるまでに時間がかかり、クラッシュ症候群で3ヶ月入院。隣の部屋で寝ていた息子さんを失う。自力で住宅再建まで、近所の娘宅へ身を寄せる。
E	1995	50代	神戸市	全壊（マンション）	なし	本人・夫・長男（23）・次男（20）	語り部ボランティア。発災直後から自宅マンションの友人たちとボランタリー活動として炊き出しを開始。後マンションの集会所が避難所指定される。マンションの避難所が終結するまで、自身の引っ越しは考えず、テント生活を続ける。のちマンションが再建されるまで、近隣へ引っ越し、仮住まい。
F	1995	37	北淡	全壊（戸建）	なし	本人・夫（37）・長男（11）・次男（9）・長女（1）・夫の母（70）	過去の家庭研調査協力者。新聞配達中に被災。被災直後、家族バラバラで過ごし、のち仮設住宅へ。自力で住宅再建。
G	1995	30	神戸市	被害なし（本人は入院先の病院で被災）	なし	本人・夫・妊娠中	多胎妊娠で管理入院中、被災。まったく動けず状況のわからない中を過ごす。この被災体験がきっかけとなり、多胎育児サークルを立ち上げる。
H	2004	30代	西脇	床上浸水（戸建）	なし	本人・夫・長男（3）・次男（3）・夫の母	育児サークルリーダー経験者。水害時は、視覚障害のある義母と3歳をふたり抱えて、パニック状態となる。
I	2004	30代	豊岡	被害なし（ハイツの1階部分は水没。自宅は2階）	なし	本人・夫・長男（3）・長女（1）・次女（1）	多胎育児中の主婦。水害時は、夫が在宅で意思決定はスムーズだった。
J	2004	30代	豊岡	床下浸水（戸建）	なし	本人・夫・長女（3.5）・長男（1.5）・次女（1.5）	多胎育児中の主婦。水害時は、子ども3人を抱えて、パニック状態となる。
K	2004	30代	豊岡	床下浸水（外出中で、家に戻れなくなった）	なし	本人・夫・長女（0）・次女（0）・本人の父・本人の母・本人の妹	多胎育児中の主婦。帰省先から自宅へ戻る途中、交通規制で戻れなくなった。夫の同僚宅へ1泊。

２．　用具

インタビューは、半構造化面接法を用いて担当研究員がおこなった。主たる質問項目は、①被災の程度や、当時の家族構成、家族関係、②災害は、個人生活や家族生活にどのような影響を与えたか、③被災後におこなわれた家族での意思決定の有無と内容について、等である。インタビューに要した時間は平均して 1 時間 30 分である。インタビュー内容は、対象者の同意を得て、IC レコーダに録音した。

３．　手続き

インタビュー調査協力者に、調査の趣旨を口頭及び書面で説明した。IC レコーダによる音声記録から逐語録を作成し、本人による確認を得たものを分析の対象とした。分析は、先行研究に指摘されている事項をもとに、担当研究員が KJ 法を用いておこなった。

その後、分析結果は次節に述べる研究会で議論され、精錬された。

第2節　「被災地における家族の合意形成とそのフォローアップについて」研究会

本調査研究プロジェクトは研究会方式によっておこなわれた。研究会委員は表 4 に示すとおりである。

表 4 研究会委員一覧

分野	氏名	所属	備考
家族社会学	野々山久也	甲南大学文学部教授	
家族社会学	片岡佳美	島根大学法文学部 准教授	H7、H8、H17 の調査研究担当（協力）研究者
教育社会学	工藤保則	龍谷大学社会学部 准教授	H7 の調査研究担当研究者

全体の研究会は合計 2 回おこなわれた。第 1 回研究会は 2008 年 6 月 14 日に開催され、プロジェクトの概要の確認および、先行研究の検討や、実査に向けた打ち合わせ等がおこなわれた。第 2 回研究会は、2009 年 2 月 26 日におこなわれ、調査結果と報告書（案）等について担当研究員から説明をおこない、各委員からコメントを得た。研究期間をとおして、e-mail 等を用いて必要に応じた議論をおこなった。本報告書は、研究会での議論と、適宜おこなわれた議論によって成立している。

第3章　結果

第1節　災害時における、家族ライフスタイルの共同選択

１．　家族は、変化する

先行研究で「家族関係は変わらない」と認識されることがすでに明らかとなっているが、実際には、家族の被災生活はどういうものなのだろうか。今回の調査結果からは、被災直後の家族が物理的に離れて生活し、役割分担を変化させ、物の見方が変化することがあることがみえてきた。

…（前略）仕事できる状況をつくらなあかんので、嫁と子どもを逃がすことをまず考えた。2 日目には阪神電車も動き出したので、そこ動くとこまで行けと実家へ帰したんです。（A さん）

連絡取れへんしね…（中略）…夫はしごと行ってるしね。市役所勤めだったので、そういうときには行かなきゃいけなくて。（B さん）

…（前略）家族 4 人命無事だったでしょ。そしたらね、無事だった、怪我もなかったということでね、もう本当に誰が何してるか全然分からなかったです。（E さん）

…（前略）だから、もうなんて言うんかな？生活みんなバラバラでしたね。（E さん）

主人は避難所で寝泊まりはしてないですよ、全然。ずっと消防の詰め所ですから。（F さん）

…（前略）（引用者注：夫が勤め先から）帰ってきて、で、消防団で出ないといけないからということで、出て…（後略）。（H さん）

もうみんな協力して（引用者注：消防団活動に）出てくださいっていうことで、（引用者注：夫に）出て行かれて…（後略）。（J さん）

以上のように家族は、災害時にひとつの場所で一緒に行動するわけでは必ずしもない。しごとや消防団活動などの、社会における「参加が期待される」活動に加えて、炊き出しや避難所運営ボランティアといった、災害時に特徴的な、自発的な活動が、集団としての家族をバラバラにすることもある。災害時においても家族のメンバーひとりひとりは、かように社会的な役割を持っており、社会の中に織り込まれているといえる。個人が社会のなかで役割を担っていることは、災害時に家族をバラバラにする場合がある一方で、日常生活の枠組みを取り戻す役割を果たす場合もある。

「新聞ね、配ってほしい」って。「待ってるねん」って、言ってもらって。だから、

その声聞かせてもらって動けたんですよね。ちゃんと動いとかなあかんやん、しごとしとかなあかんいうて。…（中略）…本当に（引用者注：しごと）してなかったらいつまでボーッとしてたかちょっと分かんないですね。（F さん）

災害時という非日常のなかで、家族ひとりひとりについて今までとは違う角度から見直すことにもなった。

（引用者注：次男は）やっぱり家族というのを見たと思うんですよね。一人ひとりをこう、…（中略）…「僕はあの時お兄ちゃんがすごい人やと分かったんや」と言うんですよね。（E さん）

日常の役割分担も、生活の変化にあわせて変化した。

…（前略）一切主人の身の回りのことは何もしなかった。わたしも炊き出しで精一杯で。ふだんはちゃんとクリーニング出して、新しいのちゃんと毎日換えてってしてたやん。それが一切「パパ自分でしてね」って…（後略）。（E さん）

２．　家族関係は「変わらない」という認識

災害によって、家族のありようや生活環境は一時、劇的に変化し、個人のものの見方は変化する。しかし、中長期的には家族関係は変わらない、と認識されている。つまり、家族ライフスタイルは安定している。

F さんは、被災直後家族はバラバラに過ごし、仮設住宅・仮設店舗を経て自宅兼店舗を再建した。震災は大きな出来事だったとは思うが、現在は「ふつう」だとも言う。

…（前略）地震があってもなかっても、普通にそのまま生活してるいう意識…（後略）。（F さん）

地震からこっち、生きていかなきゃいけない…（中略）…だんだん今になってるいう感じ…（中略）…地震からこう歩んできたのが、そのままここの人生の道になってるんで、本当に「地震がなかったら」いうのは考えないですね（F さん）

A さんは、自分が決めたことが家族にすんなり受け入れられなかったという、それまでにはなかった体験をした。このことは、A さんの家族にとっては被災直後の特殊なできごとであり、震災後の意思決定過程はそれまでどおりに安定している。

（引用者注：その後、妻子が A さんの意思決定に異議を唱えたことはあるか）あんまりないね。その辺は変わらないですよ。（A さん）

「変わらない」と考えることで、安定を図る場合もある。D さんは、隣の部屋で寝ていた息子を震災で亡くした。自身も重傷を負い、3 ヶ月に及ぶ入院生活を送った。その間に、

息子は荼毘に付されている。

…（前略）いい思い出しか残ってないからね。それで息子死んだと思いたくないの、未だに。姿も顔も見てないから…（中略）…夕方になったら「お母さん、ただいま」って帰ってくるんじゃないかなと思って。犬が玄関に行ってね、尻尾を玄関のドア叩きながらパタパタしてたら、しばらくしたら息子が「ただいま」言うて入ってくるんですよね。だから、その光景、生きてる時の光景しか思い出さないことにしてるの。（D さん）

F さんは、過去のインタビュー時には、震災体験によって「こどもたちがしっかりした」と、その変化を語っている。このように家族は実際には、多くの変化を体験している。生活環境が変化し、いなくなった家族もいる。個人の家族に対するまなざしも変化した。その変化は一時的なものもあれば、恒久的なものもある。家族は、これらの変化を「家族内相互作用」を使って安定させている。

３．　家族内相互作用

災害発生時に家族のメンバーが離れて生活したり、まったく別行動をとっていても、実際には家族は相互作用をおこなっている。ここでは、災害時の家族内相互作用の内容について、みていくことにしたい。

3-1．家族で一緒にいたい

災害時の家族は、ひとつのところにいることが必ずしもできるわけではないことを先に確認した。このようなとき、家族は物理的な凝集性を優先的に選択することがある。

そっち（引用者注：消防団活動）も大事だけど、わたしも、とにかくいてほしいって（引用者注：夫に）言って。（J さん）

今思い返して見ると、夫がいてくれたからこそ、そうやってホテルとかも泊まれたし、わたし1人だったらそこまで頭回らないし。（Kさん）

どちらの場合も、一緒にいないと切実に困ることがあった、というよりは、いて当然の夫が不在となることへの不安の表現であり、いて当然だと思っていたが、改めて思えば夫がいたからこそ意思決定できた、という語りである。つまり家族がそばにいることは、安心できることであり、意思決定を安定させることだと考えられる。

災害に遭うまで店舗兼住宅に住んでいた F さんの場合、震災直後に避難所生活をしていたとき、家族は物理的に離れた生活を送っていた。夫は消防団活動でまったく別行動だった。F さん自身は、乳児だった長女が夜泣きするため避難所には居づらく、夜間のみ親類の家に身を寄せた。子どもたちは、同居していた夫の母と避難所で寝起きしていた。

その後、家族はそろって仮設住宅にうつった。震災で全壊した自宅は、震災復興土地区画整理事業の域内に入っていた。このため早期に住宅を再建しても、区画整理事業が進展

すれば、解体の可能性も出てくる。実際に F さん宅は「2 回新築した」し、近隣でも、そういう家は何軒かあるという。予測できる事態を避けずに 2 度新築するということは、合理的だとは考えにくい。しかし F さんは、経済的な理由は最優先事項ではなかったと言う。

仮設だと、住まいは住まい、しごとは仮店舗で…いう感じで、みんなで行動できる時間がなくて。行動するところが別々で、晩御飯くらいですよね、家族が一緒におれる時間いうのは。とにかく、家族ひととこにいたかったんですよ。ここから「行ってきます」で「ただいま」と帰ってくる、そういう場所が欲しかったですね。ここなら、仕事してても子どもが帰ってきたら分かるし…。そういう空間がすごく欲しかったですね。（F さん）

現実的にはすっごいもったいないですよ。確かにね、補償金いうのは多少出ますけどね、それじゃないんですよ。（F さん）

一般に、家族はつねに一緒に過ごしているわけではない。F さんの家であれば、ふだんの生活は、朝、子どもたちを学校へ送り出した後、夫と F さんは、それぞれにしごとをするというものだった。家族が全員そろうのは、朝食を終えたら、次は夕食になる。この状況は、仮設住宅で生活していてもほぼ変わらない。F さん本人が言っているように、子どもたちが学校から帰ってくる「ただいま」、遊びに出かける「いってきます」を、しごとをしながらきくことができるかどうか、ということが主たる違いである。F さん夫婦は、この違いに価値を置いたとも言えるし、災害前の状態に、とにかくいったん戻す、ということを選択したのかもしれない。

3-2. 交渉と、共感に基づく配慮

別行動になる家族は「家族を置いていく」ことになるが、「置いていかれる」側は、「当然のこと」「仕方ない」と思える場合もあれば、「家族と○○と、どちらが大切なのか」という二者択一になる場合もある。

しごとなので仕方ありません。（B さん）

それ（引用者注：炊き出しに奔走するすがた）を見てて、自分たちは自分たちでしなきゃいけないと思ってたかも分かんないね。…（中略）…主人はもう黙って仕事へ。（E さん）

…（前略）消防行かなあかんのはもう分かってるから、しゃあないから子ども連れて避難所行ったらみんながいてるし…。だから、疑問は持たなかったですよね。（F さん）

…（前略）家をほって会社へ行くんかと。家が大事なんかしごとが大事なんかと…（後略）。（A さん）

…（前略）どっちの命をとるかみたいなぎりぎりの選択…（後略）。（＜23 さん＞）

家族が離ればなれになることを選択したくない、と感じた家族員がいるとき、家族内で交渉がおこなわれる。

A さんの場合、家族の無事を確認したのちすぐにも出社しようとしたが、妻子の反対にあう。夫婦が相互に安心できて、出社が可能となる合意点は、被災地の外に妻子を送り出すことだった。

嫁にしたら、余震がずっと続く中で、俺がいないのはやっぱり不安やと。その状態はかなわん、と。それやったら実家行ったらどうや、というとこが合意点です。（A さん）

A さんの家族は、日頃の意思決定は A さんがおこなう、いわゆる「夫唱婦随」型の夫婦関係であったという。しかしこのときは、A さんの「出勤する」という意思決定が家族に容易には受け入れられなかった。A さんにとって、これはめずらしい体験となった。

このケースでは結局、家族は物理的にさらに離れて生活をすることになるのだが、合意は形成されている。意思決定に至るまでに、妻子は「一緒にいないと不安だ」と表現し、A さんはその気持ちを受けとめ、共感を示したうえで、出社すべきであることを説明している。結果、代替案で合意が形成された。以上が、合意形成の過程でおこなわれた家族内相互作用である。ここには、なにも家族全員が被災地で不自由な生活をする必要はない、という配慮も働いており、同じようなことは、E さんの場合にも見受けられる。

E さんの長男は当時、県外にある会社の寮と家族のいる自宅、さらに自宅近くのアパートの計 3 箇所に生活拠点があった。週末は家族のいる自宅に帰ってきたり、夕食は自宅でとり、眠るのは会社の寮や趣味の機材が置いてあるアパートで、という生活だったという。震災が起こったとき長男は、会社を休んでも家族と一緒にいる、と提案した。それに対して E さんは、次のように答えた。

…（前略）「1 人でも食べれるものがあるとこ行って」って言ったんですね。家がちゃんとしててお風呂もあって、食べられるものがあるとこへ 1 人でも行ってくれた方が、親としても安心やから…（後略）。（E さん）

一方で、交渉の結果「一緒にいること」を選択したケースもある。J さんは、豪雨の中いったん職場から帰宅した夫が、防災無線の呼びかけで消防団活動に出かけたことで「パニック」になった。核家族で、夫がいなければ自分ひとりで守らなければならない多胎児を含む乳幼児を 3 人抱えていた J さんは、とにかく帰ってきてほしいと頼み、夫は帰宅した。一家はそろって避難したが、避難先でも災害救助への協力呼びかけがあった。このときも、行かないでほしいと夫に懇願した。

J さんは、これは身勝手なことだったと、後々までずっと自分を責めている。しかし、当時は自分の子どもと見知らぬ他者の「どっちの命をとるかみたいなぎりぎりの選択」を

迫られているように感じていた。この場合も、追いつめられているJさんの心情への共感と配慮の結果、夫は活動を中止したと考えてよいだろう。

3-3.「語らない」という相互作用：家族の絆

先に、家族内の災害時の合意形成過程における「交渉」をみた。これは、家族員の意見や利害が異なったときにその調整のためおこなわれる、ことばを使った家族内相互作用である。その調整は、共感や配慮をつかっておこなわれていた。

今回の調査結果からは、以上のようなことばを使った家族内相互作用だけでなく、ことばによらない相互作用による合意形成が存在することが浮かびあがってきた。被災体験、なかでも自分の感情にかかわることがらについては、語らないことが家族内の暗黙のルールになっている。とくに、つらかった気持ちにつながるようなことは語られない。「きっと、家族はこう思っている」「お互いに触れたくなかったのではないか」という発言は、家族につらいことを思い出させたくない、つらい思いをさせたくない、という、相手を気づかう配慮である。「触れたくなかったんでしょう」「思ってないんじゃない」「傷かもしれない」といった気づかいは、相手に確認することなく、ただ想像力を用いて「お互いに話を相手にふらない」ことによっておこなわれる。

> 普通だったら息子は、わたしが検査入院しても飛んでくる子やったからね、どうしてんのかなと思って、意識がもうろうとしている中で娘に、「どうしてるの？」って聞いたらね、「あの子まだ寝てるよ」って娘が。それは後で聞いたんですけどね。…（中略）…長女がそんな話をするようになったのは、震災から8年くらい経ってからですかね。ずいぶん後になってからですよ。お互いに、触れたくなかったんでしょうね。（Dさん）

> 言わないの、わたし…（中略）…家族はそんなんなっている（引用者注：抑うつ状態）と思ってないんじゃない。今でも言ってないから。（Eさん）

> （引用者注：震災の話は家族で）あんまりしないです。トラウマじゃないけども思い出すとやっぱり、心の傷を受けてるのか知らんけど、いまだにもう（引用者注：娘は）ご飯は食べなくなるし、物は言わなくなるというのはあるんでね、あんまりその話はしないですわ。…（中略）…結局は、起きたことの現象に対する話はあるけども、自分はやっぱり嫌な思いしたとか、しんどい思いしたとかいう話は言わないですね。（Aさん）

このような配慮は、生活場所の選択といった、具体的な意思決定においてもおこなわれる。Eさんのケースでは、テント生活から恒久的な住宅に移るタイミングやその場所について、可能だったにもかかわらず、夫婦で積極的に話し合われることはなかった。Eさんは、炊き出し活動に区切りをつけてから、自分たちの住まいについて考え始めたいと思っていた。いずれは、全壊したマンションを再建し、戻ってきたいとも思っていた。このことをとくに夫に言っていなかったが、夫はEさんのタイミングを黙って待ってくれていた。

（引用者注：どうして、テント生活をやめて被災地外に出なかったのか）今思うとね。結局、わたしの里もしっかりしてるし主人の里もしっかりしてるし。…（中略）…帰ろうと思えば帰れたんですね。外へマンション探して行けば、行こうと思えば行けたんですよ…（後略）。（E さん）

（引用者注：夫は引っ越しについて提案しなかったのか）言わなかったんですね。なんでなんやろね。それ、「なんでなん？」って聞かないけど、聞いてもないけど…（後略）。（E さん）

被災家族のなかでは、以上のような「言わないけれど、わかっている（つもり）」という相互作用が存在する。ただし家族員それぞれは、誰にも語らないのではなく、家族以外の相手に話している。「語り部ボランティア」として活動している人もいれば、家族に言わないことを友人には話す人もいる。そして「つらかった気持ち」を含んだ被災体験は、家族のなかでもまったく語られないのではなく、8～10 年という相当の時間を置いた後、語られ始める。

長女がそんな話をするようになったのは、震災から 8 年くらい経ってからですかね。ずいぶん後になってからですよ。お互いに、触れたくなかったんでしょうね。（D さん）

…（前略）家族で（引用者注：震災後、語り部ボランティアの活動を始めるまでの）8 年間ね、震災の話しなかったなあと。「主人は何しとったんやろ」「息子は何しとったんやろ」って。本当に知らなかったです。したくなかったんちゃうかな。あんまりしたい話はなかったでしょう。

わたしが初めて語り部するようになって…（中略）…息子にね、聞いたんですよ。「あなたあの時何しとったん？わたしは炊き出しで…」。…（中略）…8 年目の時はね「僕は震災の話したないんや」って言うんですよ。それで初めて震災の話をしたことがなかったなって気がついたんですね。…（中略）…語り部を 1 年 2 年した時に、ポツポツとわたしが語り部の話を家で「こんなんやった」とか「こういうこと言って励ましてもらった」とかした時に初めて「僕ら兄弟で亡くなった人を引っ張り出してたんや。だから、話したないねん。思い出したないねん」って言うんですよね。…（中略）…子どもたちもそういう悲しい思いをしてたんだなって初めて分かったんですね。（E さん）

家族のなかで、被災体験が共有されるのには相当の時間がかかる。それまで家族は、「あえて語らない」ことで、お互いに対する配慮を表現する。ただしこの場合には、相手が「自分のことを考えてくれている」という基本的な信頼が不可欠となる。「自分もつらかったから、きっと相手もつらかったのだろう」、「自分がつらいことを思い出したくないように、思い出させたくない」という、自分の体験に基づく他者への共感と配慮がここにも働いて

いる。

「あえて語らない」という戦略は同時に、「明示的に確認をしない」ことである。「きっとこうだろう」と、相手について想像していることは、なかなか「本当にそうなのか」と確認されない。

本調査では、結果的に一家族にひとりずつのインフォーマントをお願いした。インタビュー調査が終了したあと、「ご家族からもお話をききたいのですが」と依頼したところ、「話したがらないと思うけど…」といった、とまどいに似た反応を複数回得た。これは、家族内のできごとについて、自分以外の家族員による視点から確認されることへのとまどいだと考えられる。本調査は、家族内での合意形成過程、とりわけ相互作用を扱っている。合意形成には当然 2 人以上の関係者が存在する。したがって、その過程を知る方法のひとつは、家族内で複数のインフォーマントを確保し、内容の整合性や相違点を確認することであろう。今回の調査では、他の家族員からはあえて情報を得なかった。社会調査も、社会的現実と無関係ではない。

「あえて語らないこと」も家族の絆のひとつのかたちである。しかし同時に、楽しい体験だけでなくつらかった気持ちを共有できることも、家族のつながりの重要な一部分であろう。阪神・淡路大震災から 14 年が経ち、被災地では、体験の風化や継承の困難が指摘されているところであるが、家族内部での被災体験の共有業は、今まさに始められつつあるのではないだろうか。

第2節　乳幼児がいる家族

ここでは、災害時に特別のケアを必要とする「災害時要援護者」の一例として、乳幼児期の多胎児のいる家族の災害対応過程から、家族の合意形成のプロセスを探る。

１．　パニックになる

水災害では、避難時期を適切に判断することが難しい。「大丈夫だろう」と思っていると、あっという間に増水し、避難が困難になる。

> …（前略）もうしゃあないやんみたいな。子どもを抱きかかえて逃げられるわけじゃないんで、もう、逃げようがない。（Hさん）

> （引用者注：視覚障害のある）お義母さんは、自分の部屋にいてはりました。もう年寄りなんで2階には上がれない。本人がもういいわ、と。もう、そのときはどうしていいかわからない。わたしの頭の中もパニック状態。１人で子どもも守らないといけないし、物も上げないといけないしとかいうのがあったから、うわー、どうしたらいいのよ…（後略）。（Hさん）

> あっという間にだんだんと水がふえてくるし、いつ逃げたらいいかわからない。逃げるとしても、その場所も当時頭に入ってなかったんかなあ。（Iさん）

> もう1人で子どもと大パニックで。これ、もし水浸しになったら、私は1歳2人と3歳

1人と、だれを連れて逃げるみたいな不安がずっとあって。…（後略）。（Jさん）

養育者たちはいずれも、「いつ逃げたらいいのか」「子どもを何人も連れて、どうやって逃げたらいいのか」という、状況判断と意思決定の困難さを語っている。子ども連れの大変さは、まず荷物の多さである。

すごい雨の中を、そのまた避難する荷物がすごい大変…（後略）。（Jさん）

子どもを抱えて避難するのは、ほんとに難しいです。逃げるときにはたくさん荷物を持って出ないといけないでしょう、おむつ、ミルク、哺乳びんとか、必需品。避難した場所に備えつけてあるとは期待できないし。…（後略）。（Hさん）

乳幼児を持つ養育者、とくに多胎や年子など、月年齢の近い乳児を複数もつ養育者は、外出時の荷物が多く、平常時から多かれ少なかれ心理的な負担を感じている。これは、移動に全介助が必要な神経難病患者の場合（越智・立木 2006）と、程度の差こそあれ同様である。子育て支援の関係者たちは、子育てサークル等にも参加できずに、子どもと日々孤独に向き合っている養育者を案じている。日常から積極的に外出できていないと、悪天候という条件のなか、「子どもを連れて避難する」という選択肢を選ぶことはとても難しくなる。

また、非日常に際して、配慮が必要な相手がいることは意思決定を混乱させ、相手が複数人いることは、優先順位付けをせまることである。

とにかく、ちっちゃい子を複数人数連れてるっていうのが、パニックというか。…（中略）…だれを置いて行こう…（中略）…避難するにしても、自宅にとどまるにしても、子どもが小さいということがパニックというか、判断の感覚を麻痺させるっていうんですか。（Jさん）

H さんは、視覚障害のある姑と乳幼児 2 人の、合計 3 人を連れては逃げられないと感じたが、姑が「自分はもういい」と言ったことをうのみしたわけではない。葛藤は当然あったが、しかし「どうしていいかわからない」で、行動ができずに、とにかく子どもと荷物を 2 階に引き上げる、ということに一生懸命だった。同様に J さんは「パニック」で「誰を連れて逃げようか」と思った、と語ってくれた。これらは言い方をかえれば、ひとりで同時に対応できないので、誰から優先して対応するかという順位付けをする必要があるが、そんな厳しい判断はできない、ということになろう。

２．　意思決定を支える家族内相互作用

乳幼児等の災害時要援護者をメンバーに含む家族では、水害時にどのような災害対応行動をとるか、という意思決定が難しくなることをみてきた。ここでは、意思決定過程において、家族内でおこなわれる相互作用に注目する。

乳幼児をもつ家族では、水害発生時に「子どもを連れて、いつ逃げたらいいかわからな

い」というパニックになることがある。このとき、避難するかしないか、あるいはいつ避難するかという、家族内の合意形成、すなわち意思決定の難しさの要因は、水量といった外部要因の見積もりが困難であることや、子ども連れであることで、物理的に移動が困難になるということだが、「どうしたらいいのか」という問いを受けとめてくれる相手が不在だという、家族内相互作用の不足でもある。

もう、どうしていいかわからへんし、避難するのかどうかもわからへんし、とりあえず、どこまで水が来てるかって、窓から見たら、だれかが通ったんです、水の中をシャバシャバと。あ、主人やと思って、「どうするーん、逃げたらいいの」とか言って。実際は、知らない人でした。…（後略）。（Hさん）

わたしの頭の中もパニック状態。１人で子どもも守らないといけないし、物も上げないといけないしとかいうのがあったから、うわー、どうしたらいいのよって。何回も電話、だんなに電話したけど、通じない。（Hさん）

うちの夫は当時もう消防団員ではなかったんですけど、土のうを積みに出かけちゃって…（中略）…まずその時点でもうパニックなんです。（Jさん）

…（前略）もう1人で子どもと大パニックで。これ、もし水浸しになったら、私は1歳2人と3歳1人と、だれを連れて逃げるみたいな不安がずっとあって…（後略）。（Jさん）

ひとりで状況判断をし、意思決定をおこなわなければならないという事態に追い込まれた H さんと J さんはパニックになり、夫に連絡をとった。H さんは「どうしたらいいのか」尋ね、J さんは帰ってきてくれるように頼んだ。ふたりとも、避難する方がよいか、避難するならいつがよいか、という意思決定について近隣の人とやりとりした記憶はない。この、孤独な状態で、刻々と変化する困難な状況に対応しなければならないということが、心理的にパニック状態を引き起こしていると言えるだろう。

I さんの場合は、少し事情が異なっている。I さんの場合は、夫が自宅に戻れており、水量が上がってきても消防団活動に出かけることはなかった。さらに近隣には、土地に長年住む、子どもの保育園友だちの祖父母がいた。このため、I さんは、夫や近隣の知人との相互作用を通じて、意思決定することができたのである。

「もうしやあない、今さらこんな小さいの2人、3人おるのに、うちは動けれへん！絶対2階まで水が来ることはない！！」って（引用者注：夫が）判断して。（Iさん）

…（前略）「こんな台風今まであったん」って（引用者注：居住年数の長い近隣の知人に）電話かメールしたら、「初めてだ」って言って。「もし一軒家の＊さんが逃げなるんだったら、うちも逃げるで、そのときは連絡して」って…（後略）。（Iさん）

以上のことから、パニック状態を鎮め、効果的な意思決定がなされるためには、家族内相互作用が円滑におこなわれることが必要であると考えられる。

３．　求められる支援

乳幼児を持つ家族の被災生活は、災害復旧すなわち「後片付け」場面においても困難があることが明らかとなった。

> 1 歳児ですけど、子どもを保育園に預けたんです。…（中略）…そんなに早くから預けるつもりはなかったんですけど、家の片付けもあったし、店…商売のこともあったし、その子に付きっきりで見とられへん。片付けなんかは普通の仕事じゃないんで危ないんでね、一緒におらせるわけにいかないんで、もうそうしたら預ってもらおうか…（後略）。（F さん）

> 水害のときは、後片付けが大変でした。子どもは家にいて面倒をみないといけないけど、親は片づけないといけないし。（Hさん）

> 何が一番大変だったかというと、後片付けが大変でした。…（中略）…床下浸水だったんで、その床を上げて、下を乾かしたりとか、泥を取ったりするときに、3 人の子どもを連れてたら仕事ができない。ほんとに作業が進まない…（後略）。（J さん）

要介護高齢者の場合、介護保険が活用されており、社会化がすすんでいる。したがって、自宅が被害を受けたり介護者の生活が変化すると、本人の心身状態の変化の有無や程度によらず、緊急避難的にショートステイの利用調整がおこなわれる。

しかし乳幼児の場合は、養育者（多くは母親）が面倒をみることが前提となっている。養育者はまず、親やきょうだい等の私的な育児資源を活用することが多い。このため、サービスの供給側も受給側も、被災による一時的な保育ニーズの発生へ対応するという発想にはなかなか至らない。しかし、自然災害時は地域一帯が被災状況にあり、私的な資源が使いづらい場合もある。

> 夫の両親はもう高齢なんで、育児とか頼める感じではないんです。周りがみんな被災されてる方が多いんで、なんか周りにも頼みにくいっていうか、親以外の近所の人とかも。（Jさん）

F さんの場合は、夫婦共稼ぎであるため、もともといずれは保育所にと考えていた。震災にあったことで入所時期を早めて、災害復旧に対応した。H さんは、市役所に保育ボランティアをお願いできるか相談したが、災害復旧に来ていたボランティアさんは確かにいたが、もう帰られたあとだと説明を受けたという。

一時的に発生する保育ニーズは災害復旧に限らず存在し、対応する制度も存在する。たとえば、近畿地方のある市の例であれば、養育者のパートタイム就労等に対応する「非定型的保育サービス」および、養育者の急病等に対応する「緊急保育サービス」、養育者の育

児疲れ等に対応する「私的保育サービス」といったぐあいである。このような一時的な保育は通常、利用者と保育所との直接契約でおこなわれている。このため、行政が措置をおこなう保育所入所とはことなって、その詳細を行政が直接把握しているわけではない。台風 23 号水害の復旧にかかる一時入所について、豊岡市と西脇市への電話によるヒアリングによれば、どちらの市でも直接契約による一時保育については、把握していない。豊岡市では、災害復旧を事由にした入所措置が 3 件あったそうである。

加えて、「子どもは親が面倒をみればよい」という認識は、当の子どもたちの希望であるとは限らない。I さんは、住んでいたハイツの 1 階部分は水に浸かったものの、2 階の自宅は被害がなかった。そこで、自分の子どもは親に預けて、友人とともに災害復旧のボランティア活動に出かけた。I さんが担当した活動は、幼稚園の後片付けだった。このとき I さんは、幼稚園に通うくらいの子どもの面倒は、家でみていればいいではないか、幼稚園の復旧なんて、特に急ぐことはないのではないか、と思ったという。

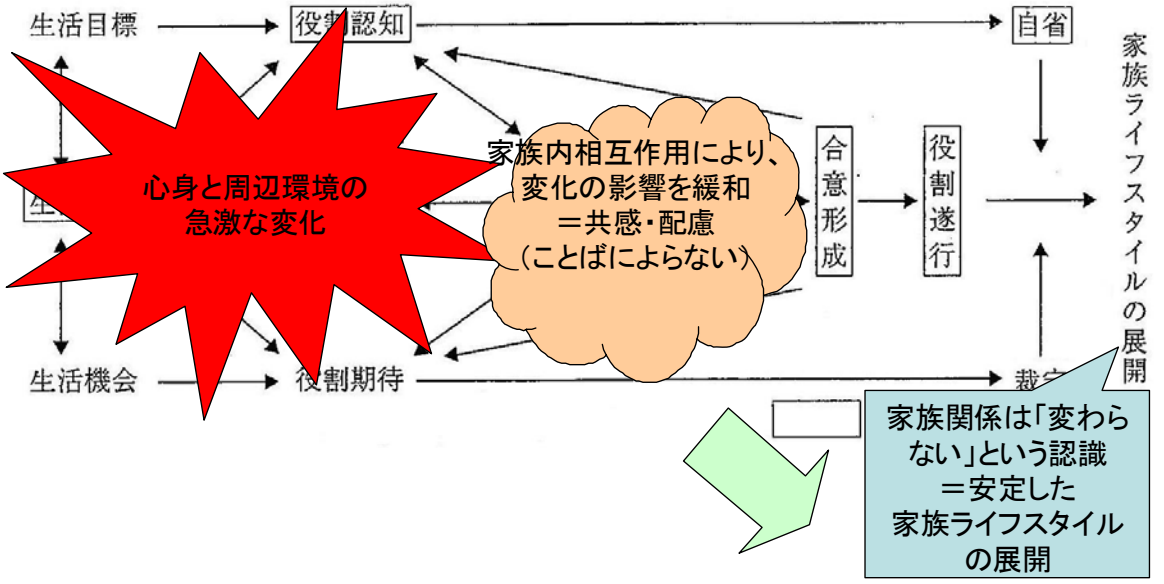
しかしその後、自分の子どもの保育所が登園再開になって、子どもたちがイキイキと遊んでいるすがたをみて、認識を改めたという。

> …（前略、引用者注：水害経験で）子どもって、やっぱりストレスもたまっている…（中略）…幼稚園や保育所に行ったらガァーって遊べるのに、そこが使えないということは、余計とストレスをためてる。ああ、早う幼稚園をきれいにしてやってよかったんだなあって思いましたねえ。（Iさん）

「10 年目の検証」では高齢者や乳幼児等の、社会的に弱い立場に置かれがちで、自分の意見を表明することの困難な家族員について、その自己実現に配慮することが必要だとの指摘があった。乳幼児に関して言えば、一時的保育ニーズへの社会的対応の必要性は、養育者にも、行政にもうまく想像されていない。一時的保育ニーズに対して社会的に対応することは、養育者にとって災害復旧作業の負担軽減になるとともに、子どもたちにとっても、緊張の緩和を生む可能性もあると考えられる。

第4章　考察と提言

調査結果から、被災家族が自分たち家族のことを「変わらない」ように認識している場合でも、実際の災害対応にかかる内的過程、すなわち「家族内相互作用」は、相当にダイナミックなものであることがわかった。とはいっても、なにか目立つ活動がおこなわれているというわけではない。今回特徴的に浮かびあがってきた家族内相互作用では、ことばはほとんど使われず、「行動」や、ときに「察すること」で家族のまとまりを維持し、被災体験を乗り切ってきたことが明らかになった（図 4）。



出所：『現代家族のパラダイム革新―直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』

図 4 確認された、災害時の家族ライフスタイルの共同選択過程

そしていま、長期的なあゆみのなかで、言語を使った体験の共有が始まっている。個別の家族には、ことさらの「災害を乗り切った感」は、今となっては意識にのぼらないのかもしれない。しかし、「家族の潜在的な力」ともいうべき「静かなちから」はついているのではないだろうか。これまで、震災体験は学校や地域社会のなかで、個人的に「語られ」てきた。震災発生から 10 余年が過ぎ、「語り継ぐ」ことの必要性が指摘されるようにもなってきている。ところが、家族内部では、震災体験は現在、必ずしもことばを使って共有されてはいない。

これまで家族は、「語る」という具体的な行動を選択してこなかった。しかし、そこに情緒的な交流がなかったわけではない。むしろ、ことばをつかわずに家族に対する共感や配慮を表現してきたと言える。具体的な行動があれば、相互作用は客観的に理解が容易になるが、「語らない」ことは見えにくい相互作用であると言える。

容易には震災の体験を語り合わなかった家族は、震災後相当の年月を置いて、語り合い始めている。家族のコミュニケーションのありようが変化し始めていると考えてよいだろう。「しんどい体験」を共有することで、「家族の絆」はより深められると考えられる。語

り始めた家族員に、他の家族員が適切に応答できるかどうかは、今後問われることになるだろう。

ところで、大規模な自然災害が発生したときにいのちを守るためには、自助と共助の仕組みが欠かせない。自らの安全を確保し、近隣等での救助活動に参加できる条件を整えることが、その仕組みを支えることにつながる。地域の消防団等での活動が期待される世代は、子育て世代と重なっていることから、災害時に妊産婦や乳幼児等を抱える家族の安心と安全を確保することは、一家族の利害と地域社会全体の利害とを一致させるために、重要なことがらである。

今回の調査結果からは、安全の確保目的というよりはむしろ、安心を得たいという目的から、しごとや消防団活動等の社会的な活動に参加しようとする家族を引き止めるケースがあることがわかった。引き止めている家族は自分本位の気持ちから行動しているというわけではなく、ケア対象を複数抱えていてパニック状態であったり、「そうすべきでない」と後ろめたく思いつつ引き止めている。A さんは、災害発生時に出社できるかどうかは、住宅が全壊したかどうかといった実際の家屋の被災程度によるのではなく、家族に代表される自分の生活のよりどころが、安心な状態だと判断できるかどうかに依存する、と語っている。「安心な状態」というのは、一義的には、家族が情緒的に安定している状態を指すと考えられる。安心な状態をつくり出すためには、避難すべきかどうかや、生活条件が激変したときにどう対応すべきかという意思決定が、家族や日頃つきあいのある重要他者の支援を得て、円滑におこなわれることが必要である。

調査結果にみるように、意思決定は、まずは「家族内相互作用」に支えられる。さらに、近隣の人間関係によっても支えられうる。I さんは、子どもの保育園で親しくなった、近隣に昔から住む老夫婦に、経験に基づく判断材料の提供を求めている。F さんは、震災直後に夫に会ってから、夫とはまったく別行動となったが、そのことについて特に不満や不安は感じなかった。避難所に行けば知った顔がたくさんある、とわかっていたからである。これらはいわゆる「地域コミュニティ」のちからということになろうが、同様の「安心の仕掛け」は、「地域コミュニティ」の活用以外でも、つくることが可能である。

ケアが社会化されている場合、たとえば障害者や要介護高齢者等であれば、本人を中心にサポート・ネットワークが形成されている場合が少なくない。ケアは日常的に担当者によって提供されており、どこに誰がどのような状態で住んでいるのかという情報は、在宅ケアの担当者によって共有されている。このため、災害が発生して、環境が変化したときの対象者の様子を想像しやすく、「あの人は大丈夫だろうか」と、家族以外で複数の人間が気づかうことになる。越智・立木（2007）は、自ら災害対応行動を積極的にとることが困難な神経難病患者とその家族を題材に、災害時要援護者及びその家族について、外部の支援者からの働きかけが、災害リスク回避行動をとるために有効であると報告している。

これに対して乳幼児の場合は、家族の他に日頃ケアにかかわっている人数はそう多くなく、災害発生時の養育者のパニック状態は容易に想像されない。このため、家族以外に気づかってくれる人は少なくなりがちである。平常時は、当事者が中心となって運営される子育てサークルのような「ピアサポート」が地域における子育て支援の中心である。しかし災害時には、それぞれが同じように「パニック状態」になり、他人のことを気づかうことは困難な状況になることは容易に推察される。したがって養育者は「家族内相互作用」

に頼るか、頼れない場合は孤独な状態におかれることになりがちである。

「ピアサポート」は、平常時に有効な取り組みであるが、災害時の自助・共助の仕組みづくりという観点からは、より多様な世代・立場による平時からの育児支援も存在することが望ましい。具体的には、子育て体験学習との協働によって、中高生を育児支援の担い手のひとりとして位置づけることや、子育てサークル等に「託児ボランティア」等のかたちで、祖父母世代や子育ての先輩世代を活用する等が考えられる。現在、少子化対策の観点から、育児支援を社会全体で担おうという理念が提唱されている。これは平常時のみならず災害発生時にも有効であると評価できる。より具体的な取り組みとして、社会に根付かせていくことが望ましい。

以上のような取り組みをとおして、家族内外の共感や配慮を、乳幼児をもつ家族が災害時に獲得できれば、家族のなかで災害時に社会的な活動が期待される人がいる場合にも、乳幼児とともに残される家族員の不安を軽減させることにつながると考えられる。

災害時要援護者を成員に持つ家族が、災害発生時に円滑に避難行動をとるためには、日頃から外出に慣れていて、外出に対する心理的な負担感を下げておくことが大切であると考えられる。乳幼児を例に考えると、ひとつにはベビーカーがそのまま通れるような環境を社会の側が整備することが重要である。一方で、個々人の取り組みとしては、実際に乳幼児を連れて外出している「子育ての先輩」に接することも、効果があると考えられる。

具体例のひとつとして、明石健康福祉事務所は「多胎家族交流会」を年数回おこなっている。これは、市内外の自主的に活動している子育てグループの協力を得て、多胎妊婦から、多胎育児の先輩までが集う会である。助産師や保健師も出席しており、単胎妊娠との妊娠経過の相違点の説明があったり、その他細かな質問に対応できる会となっている。この会の魅力の大きな要素として、専門家に相談できることが挙げられようが、同時に、自分より少し先の状況の人たちと知り合い、実際に様子を知ることができることも、大きな特徴のひとつである。「赤ちゃんを連れていても『こんなふうに』外出できる」という実績を目の当たりにし、そのための工夫を知ることで、間接的に乳幼児を連れた外出に対する心理的な負担感を下げることが期待できる。これまでの議論と調査結果をふまえ、政策的提言は次の 3 点である。

1．被災体験を「なんとか乗り切ってきた」家族は、「あえて語らない」戦略をはじめとする、共感や配慮を用いた多くの相互作用をおこなってきた。このような「静かな強さ」を持つ被災地の家族は、体験の共有を始めている。家族の中で語られ始めた被災体験に注目すべきではないか。
2．災害時に消防団等で活躍が期待される世代は、子育て世代とも重なる。これらの世代から、災害時に心おきなく「社会参加」してもらうためには、日常から育児に関わる関係者を複数確保し、脆弱性が高くなる家族の安心を支える必要がある。
3．災害時要援護者となりうる人々は、外出にかかる心理的・物理的コストが高い。災害時に円滑な避難行動をとるためには、平常時からの外出支援をおこない、外出についての主観的コストを下げることが必要である。

以上、被災地における家族の合意形成とそのフォローアップについて、家族ライフスタイルの共同選択過程という概念装置を用いて考察してきた。災害を経験した家族は、日常よりも共感や配慮をより多く用いた「家族内相互作用」をおこなうことで、変化の影響を緩和させ、家族ライフスタイルを安定させていた。

大規模災害を経験しても、家族関係は変化しない、と主観的に感じられていることから、家族は頑健な社会制度であると言うことができる。同時に、「変化しない」という印象・主観は、共感や配慮といった情緒的な家族内相互作用を用いた柔軟な対応によって得られる。このことからは、家族は柔軟な社会集団だとも言える。いずれにしても、家族内相互作用は、環境や個人の変化を緩和させる機能を持つ。災害時に家族をはじめとする「人のつながり」は、個人が社会の網の目から浮き上がってしまうことを抑制する、重要な役割を果たしていると言えよう。

［謝辞］インタビュー調査にご協力いただいた皆さまに、こころより御礼を申し上げます。

［文献］

土岐憲三・林春男・河田恵昭，2005,『12 歳からの被災者学—阪神・淡路大震災に学ぶ 78 の知恵』日本放送出版協会.

石原邦雄，2001,「家族ストレス論的アプローチ」野々山久也・清水浩昭編『家族社会学の分析視角』ミネルヴァ書房，221-238.

野々山久也，2007,『現代家族のパラダイム革新—直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』東京大学出版会.

越智祐子・立木茂雄，2006,「『災害時要援護度』概念構築の試み—台風 23 号水害時における在宅人工呼吸器装着者の災害リスク回避行動の分析から」『評論・社会科学』81: 19-39.

————ほか, 2009,「多胎育児の社会的困難についての一考察－産育習俗を中心に－」「双生児研究学会第 23 回大会（大阪市立大学)」口頭報告.

大木秀一，2007,『多胎児家庭支援の地域保健アプローチ』ビネバル出版.

立木茂雄，1999,『家族システムの理論的・実証的検証－オルソンの円環モデル妥当性の検討』川島書店.

資料：個別インタビュー要約

（2008 年 8 月 12 日）

○A さん

報道屋の習性ですかね、とりあえず、えらいこっちゃとカメラをまわしました。自宅は西宮ですけども、神戸市内がどうなってるかわからん中で、まず自分の近所の家の中を撮って、自宅よりも周りのほうが大ごとやんかというのが後でわかるわけで。

当時、家族は嫁と子ども１人ですね。家の中はめちゃくちゃになったけど、幸いけがしたのは僕ぐらいですかね。嫁も子どもも別にけがはなかったですけど。電気が一瞬来た時点で、会社が放送していることはわかりました。

とりあえず、ビデオ持って会社行こうと思って車に乗った。出かけるまでにはいろいろあったんです。家がぐちゃぐちゃの状態でどないすんねんという話で、家をほって会社へ行くんかと。家が大事なんか仕事が大事なんかという話にいくわけですよ。家族がこんな状態で、子どもがおびえてる中で、家族放って行くんかと。それで家族を説得して、こういう仕事をしているから行かなあかんねやというんで、納得させるのに時間がかかった。子どもはその時、小学校４年かな。当日はとにかく、そういう仕事やからそれは理解してくれんと、という感じで出かけたね。

カメラ持って、阪神高速落ちてる辺りまで行って、これは行ける状況じゃないなと。うちの放送はできてるから、ちょっと考え方を変えようかなといって戻ったんです。電波が出てなかったら、その日に行ってたと思いますわ。今放送してる同僚たちがね、多分 2 日ぐらいで力尽きてしまうん違うかなと。それなら、その力尽きるころに行く方がいいかな、と考え直して。家へ帰って家族にその辺の話をして、自宅の近くにも同じ会社の人間いましたから、そいつらにも「行くのをやめろ、交代要員になれるタイミングで行こう」という話をして。

行ったら今度は戻れないというのは、大体想像つくので。周囲の様子が見えてきましたから、今度は自分が仕事に専念できる状況をつくらなあかんと考えた。そのためには、嫁と子どもを逃がす。2 日目には阪神電車も動き出したので、動くとこまで行けと、東海地方にある嫁の実家へ帰したんです。大阪まで行けば電車も動いてるんで。で、学校のことがあったんで、これは困ったなと。でも当然、学校はしばらくみんなお休みモードに突入で。疎開じゃないけど近隣の府県が受け入れをするというのもなかったので、とりあえず実家へ帰りなさいと。で、帰って 3 日、4 日ぐらいしてからかな、実家の校区の小学校に入れたんです。被災地から来た子ということで取り上げられたりして。そこの地元の小学校で１カ月ぐらいおったかな。

嫁と子どもさえそっちへ行ってしまえば、どうせ家の中、水も出ないしガスも電気もない中で、俺は会社来るわけで、まあ会社も同じ状況やからどこにおっても一緒かみたいな感じですね。3 日目に、自転車で出社しました。

嫁にしてみたら、あんた一人でどうすんのという話は当然あるわね。でも、結果論ですけど、結局、家におっても水もないわっていう中で、家族みんなでえらい思いするより俺一人でえらい思いしとったらええ、みたいなとこもあってですね。

やっぱり、一番思ったのは、自分ら報道の仕事しとって、まさか自分が水くみに並ぶな

んて思ってないわけじゃないですか。給水車に並んで「俺、なんか鍋持って並んでるし」とかって思うわけですよ。今まで俺、放送する側だったのが、子どもと一緒に並んで、放送せずにいていいのか、と。

じゃあ、自分は放送して水くみは家族にさせて、西宮で一緒に生活をする、という方法をとるのか。でも、放送を受け取る人のためになることをせなあかん、というのがあって。やっぱり家族のことと関係のない状況をつくっておかないと、仕事に没頭できないかなというのはあります。

この辺の話はよう出るんですけど、ボランティアの人でもそうですけども、自分が行って何かをしてあげようと思うときに、行ける状況というのがなかったら無理ですよ、絶対。家はどうするのというとこやと思いますね。家族のことも気にかけつつ、給水も並びつつ、仕事もしつつということは無理。先発隊が力尽きるときに、交代のローテーションに自分が入れる状況をまずつくっておかなきゃいかんということですよね。

嫁にしたら、余震がずっと続く中で、俺がいないのはやっぱり不安やと。その状態はかなわん、と。それやったら実家行ったらどうや、というとこが合意点です。うちの娘、23ですけども、いまだに地震来ると御飯食べなくなるもん。食べれないんですよ。ゆらゆらっと御飯のときに来ると、もう固まってしまって。余震が続く悲惨な状況から外してあげるという判断ですわ。

家族か仕事か…で、俺って何やねんって言われると困るとこなんですけど、やっぱりジャーナリスト。そしてもう一つは、家にない物は会社にもないということ。例えば、家で水出えへんかったら、会社へ来ても水出ない。どこにおっても一緒やという、さっきの話です。ただ、大きな違いは、一応放送局なんでね、会社は発電機があるんで電気はあるんですよ。ただ今度は発電機の燃料がなくなるんで、うちの社員が製油所直接買い付けて運んだんです。その燃料が来ないと、何ぼ頑張ってニュースじゃ言うたって、止まってしまう。

大災害のときに会社で仕事するかどうか。それね、人によると思うんですよ。うちの社員の中にも「行かない」と決めてる人間もいるんですよ。行けないと言うやつと行かないと決めたやつと。だから、「行かない」の決定打もやっぱり家族ですわ。報道の使命というのはあるかもしれへんけど、やっぱり家族あっての自分となると、その人は家族をとってますね。

大半の人間は、僕みたいにまず家の始末をして、出社する。同僚で、家が完全につぶれたやつも、親と一緒に住んでたんですけど、けがした親を病院に連れて行って、親戚の家へ落ち着かせてから出てきてます。でも、今度家帰ったら誰かに荒らされてるんですよ。なんてことや、と思うけど。

「俺家ないし、なくなったから会社へ来た」というやつも何人もいました。「おまえ何で半そで着とん」、「ないし」。パジャマにサンダル、Tシャツで会社にいる、寒いときに。「家つぶれてるし荷物出されへん」、というのがいましたからね。そして変な話、悲惨じゃないのよ。悲惨なんやけど、笑ってんのよ。家ないし、あははって。それでも、この仕事はせなあかん、という使命感が重なって。異常なハイテンションですわ。

今いろんな企業で、危機管理とか災害時の人員集めとか言ってますけど、自分の家族が気になる状態かそうでないかというのは大きなポイントだと、俺は思う。自分の家族がど

うもなかったらね、一番最初の話ですけども、テレビで水くんでるの見てる側だもん。それなら出社できるんです。でも、自分で水くみ並んでる人はね、行けないんです、会社へ。そこの差はやっぱり一番大きいかなと思いますね。

会社の危機管理というのは、それぞれの社員の家族のことまでかんがえているかどうか、だと。これがなかったら、議論はちょっと薄っぺらいなと思う。背後にある家庭を無視して、社員個人だけを抜き取ることはできないんじゃないか。その人が会社の事業継続には必要だとわかってるなら、その人を業務につかせるだけの根拠をつくらないと。家族に、「家と仕事どっち取るのよ」って言われたときに、その社員は返事できないと思いますわ、多分ね。

うちの場合も、もうもう、泣いて行かんといてですね。嫁も子どもも。嫁は外がそんな状況やったら、どこへ物買いに行ってええの、状態ですわ。それで、とりあえずコンビニへ行ったんです。これ、買うとかなあかんの違うか、と思ってコンビニへ行ったら、案の定コンビニも半分壊れかけの状態で営業してるんですよ。棚にはもうほとんど物がないですわ。思うことみんな一緒や。で、そのときにカップもんやら何やら、そこにあるだけのもん買うて家へ帰って、とりあえずこれを使えと。今でこそいろいろ家に、乾物やら缶詰とか置いてるけど、震災当時は置いてなかったですから。水とか牛乳とか何かあるもんそこらじゅう買いましたね。

それだけして、「これだったらしばらくしのげるやろう、じゃあ行ってくるぞ」というのが俺の考えだった。そうしたら、いやいや何を言うてんねん。行かんでええやんか、ちゃんと放送してるしって。そこからです、「何で行く必要があるの」と。

それで、それはやっぱり報道機関に勤めるものの使命やと。ジャーナリスト魂じゃないけど、報道するのが仕事。人助けに行かなっていう、そういう感覚にも似た、何なんでしょうね。早いこと情報を伝えにゃあかんという、そういう意識だと。

今、家族で話すことといったら、うちの家で熱帯魚を飼ってたんですよ。地震のとき、そんなすごいことやと思わなくて、嫁と子どもはわあわあ言うてんのやけど、何助けに行ったかっていうたら、水槽を助けに行ったんですよ。嫁と子どもは、あんたは私ら言うてんのを聞かんと水槽助けに行くから、それでけがしたっていまだに言いますよ。そのときは、そこまですごい地震だと思わなかったですからね。「うわ、地震や、これ水槽こけたら下の家に水漏るわ」ぐらいのイメージだったんです。寝起きで飛び起きてるから、結局は支えきれず、そのままぶちまけてるんですけど。水槽が割れて、ガラスでケガをした。

（引用者注：娘さんは、自分が泣いて引き止めたことを覚えているか）覚えてますけど、その話はあんまりしないですね。地震のときの話は、あんまりしないです。トラウマじゃないけども思い出すとやっぱり、心の傷を受けてるのか知らんけど、いまだにもうご飯は食べなくなるし、物は言わなくなるというのはあるんでね、あんまりその話はしないですわ。

まあうちの嫁は「同じような災害が起こったら、どうせまた行くんやろ」って。「そうや」ですね。あのときはえらいことやったってそのときそのとき（引用者注：1 月になると）、ぽそぽそとは話をしますね。「あんたは私らほって水槽支えとった」とか、朝歯磨いてるでしょ。水道、じゃーって流したまま歯磨きしてたら、「あんた、あんときのこと忘れたん」って。「くみながら歯磨いとったのに、今は流しっぱなし」とかいう話はあるけどね。

でも、本当にばたばたしたとか、えらい思いして実家へ行ったとかいう話は、あんまり出ないですよね。起きたこと、現象に対する話はあるけども、自分は嫌な思いしたとか、しんどい思いしたとかいう話は言わないですね。

ふだんから、あんまりいわないほうかな。だから、嫁と子ども、泣いて行かんといてってあんだけ言ったのは初めてぐらいじゃないですか。ふだん、夫婦で意見が食い違うことや嫁が反対することなんてほとんどない。何か事があったときは僕が決める。結果は、外れのときも当然ありますけど、まあそれで決まっていくという。なのにあのときは、自分が行くって決めても、なかなか決まらなかったということですわ。

自分が振り返って思うことは、こういう放送局にいるからそう思うんかもしれんけど、人の世話もせなあかんけど、やっぱりそこには限度があるなということ。実際自分がそういう目に遭うと、やっぱり自分とこほってボランティアしてられんぞというのは本音ですわ。さっきの話じゃないけど、自分の生活基盤むちゃくちゃやったら無理です。ほんまにそこの地域の人で、みんなむちゃくちゃ同士になった中では一緒に共生というのはあり得るけども、そこへ行ってお手伝いできる人は、自分はちゃんとこっちに住める状況があるから行けるわけ。だから、俺がさっき言ったように、嫁と子どもを実家へ帰したりとか、家族の生活基盤をきちんとしないと、俺だって自分は行こうと思ったって、行けない。

それから、別に風呂1日入らんかってどうよって。1週間、10日風呂入らんでも死ねへんがなって。過去を振り返って思うと。あんときに、歯磨きするのに、コップごとに水をくんで。当たり前のありがたさが、当たり前に感じられるようになったというのが地震ですよ。

この阪神間に住んでる人の物の言い方というのは、地震から変わったというのも御存じのとおりで、震災以前、震災以降という言い方があるじゃないですか。神戸の人みんなそういう言い方する。その辺、うちなんかでも一緒です。あんときはと。あれからこうでと。

この地域に住む者として、その意識でつながってるといったらおかしいけど、振り返りはそこにある。みんながしんどい思いしてんのは一緒なわけで、あんときこうやったねという共通の話題になって、だから今こうしようね、やけども。実際は、こう普通になってくると、みんなで共同でこうしてこうしてって、なかなかそれは難しい。

10数年のあいだに、人の移動がある。震災を体験として知らない人。で、体験したけどいなくなる人。よそから来た人は「あんとき大変だったでしょう。」って言う。そら大変に決まっとるがな。大変に決まってんねんけども、それを経験しないと本当の大変さというのはわからんわけで。

自分も、もし体験してなかったらやっぱり人ごとですわ。ましてやマスコミの人間やから、行って「どんなお気持ちですか」って、何もわからんまま聞いてますわ。やな気持ちに決まってるわなって、大変に決まってるわ、何聞いとんねん、あほちゃうかと。震災を経験したアナウンサーなり報道の記者は、そんな聞き方しないです。行政に何を求めますかとか、被災者支援には何が要りますかとか、そういう聞き方になってますわ。何を今、支援してほしいですか。何を訴えたいですか。大変ですよねって、つらいですよねって、つらいに決まっとるがなと。

自宅マンションは、給水管とか配水管はやり替えが必要な状態だった。マンションの共益費では足らんので、みんなから集めてまわるのはやらなあかん。できない人は、そこを

去らざるを得ない。たまたまそのときは買い換え需要か知らないけど、参加しないという人もいますから。住民投票みたいになって 100%意思決定ができなかったら建て替えできないとか補修できない、そういう問題もクローズアップされて、問題提起するきっかけになったのは大震災。

食品備蓄については、大都市での災害だと、自分たちでなんとかしないとけないのは 2 日間程度だと思っているので、その程度してますね。震災からすぐのころは、水なんか必ずこんな大きな箱で買って、賞味期限が近づく前に消費して入れ替えてたけど、最近忘れてるわ。10 年超えてくると、最近また来るよ来るよって言ってるから、用意しとかなあかんでという話はするけど、実際にはサイクル、パターンは崩れかかってる。

何か買うとかなあかんねとかいうようにはなった。嫁の実家には、3 日以上置いときなさいって言いました。東海・東南海も想定されてますしね。もともとお義母さんは買い置きする人でしたが、より意識してもらってますね。

（2008 年 8 月 16 日）

○B さん

結婚するまでは幼稚園教諭をしていました。結婚してからは、保育所をしてたんです。無認可の共同保育所。市から助成金をもらいながら。友達が、一緒にしませんかって言って、自宅近くのマンションの一室で始めて、私の長女も一緒に預かってた。同じような子をね。あのころ、産休明けの育休というのがなかったんですよ。そういう子たちを預かる保育所をずっと、11 年間。当時珍しかったから、結構新聞にも載りましたよ。

そこへおばあちゃん（引用者注：夫の母）が倒れて、同居することになって。6 年間、在宅で介護をしました。そのおばあちゃんは、震災の 4 ヶ月ほど前に亡くなりました。怖い思いをさせなくてよかった、と思います。避難するのも大変だったと思うし。

介護中心の生活が終わって、趣味でビデオ撮影を始めたんです。はじめは、当時小学生だった息子の運動会とか撮ってて。地域にビデオクラブがあったんですね。10 人ぐらいメンバーがいて、3 人ぐらいはテレビ局の映像レポーターに登録していました。そのレポーターに誘ってくれる人がいて。市民による映像アーカイブは、そのときのものです。

揺れたときね、うちの家だけ揺れてると思ったんです。うちの家どうなったんやろう思て。何が起こっているんやろう、とこわかったです。まだ暗かったし。何かゴーッっていう音がして。それで部屋の中を見たら、倒れてるしね、本棚が。息子が下敷きになってました。それで、周りの家の状態を見ても、ちょっとただごとじゃないということがわかって、だんだん夜が明けてきて、電気がつくようになったんですけど。最初、朝御飯食べるのどうしようって言って、コンビニに行ったら、コンビニがらがらだったんですよ、みんな買い物して。

自宅は、壁にひびが入ったくらいですけど、ご近所さんみんなが外に出ていて。避難しなさい、と言われて小学校に避難しました。そしたら教室に通されて、この区画の人はこの場所にいてくださいというような感じで。御近所さんみんなそこに待機してたんですよ。体育館はもういっぱいで入れなかったものですから。どこからかおにぎりを運んでくださったり、そしてテレビで神戸の方を放映してました。そしたら、すごい焼けてるわけ。親戚が神戸の方にいたから、連絡がとれなくて。それは怖かったです。夫は仕事行ってるしね。公務員なので、そういうときには行かなきゃいけなくて。夫が帰ってきたら、家族はだれも自宅にいない。置き手紙をしておいたので、それをみて夫は小学校に来た。それで、実家に行きなさいと言われました。で、夫以外の家族 4 人みんなで行きました。夫は勤務先に戻りました。私の実家は近所ですが、被害はなかったんですよ。

震災の被害を撮りに行くのって勇気がいるんですね。地震が起こって 1 週間は、自分達のことで頭がいっぱいでした。ちょっと強い余震が続いていたので、もしかしたらまたあの揺れになるかもしれない、出ていっていいのか。そして、被害を撮っていいのかどうかという…。そういう気持ちにならないというのか。

1 週間して、皆さんが希望を持てるテーマをと思って、ボランティアさんたちを撮りに行きました。ずっと気にはなってたんやけど。心の中で撮るべきか撮らざるべきか悩みました。いろいろ葛藤がありまして。だから、みんな頑張れというテーマで、ボランティアでマッサージしてくれているシーンとか、北海道ガス会社のガスの復旧支援とかを撮ったりしました。炊き出し支援している方、ボランティアで家屋の耐震の調査をしてくださっ

ている方も撮りました。行政の中で頑張ってる人を撮るとか、今からボランティアに行きますとか、そういう方を紹介するつもりで撮ったんです。

活動に対する家族の反応は、特にありません。最初ちょっと夫が、やっぱり被災された人に対してどうかと。だから、かわいそうに思うようなところは撮ってない、出してません。みんなが笑ってるみたいな、元気が出るような楽しいとこを撮りました。

娘は、母として撮るのではないところを撮っていきたかったんじゃないか、と言ってます。母として自分の子を撮っていたけれども、そうじゃなくて個人として何かしたいことが出てきたのかなという、関心が向いてたからそういうふうにビデオというのを選んだかなと見てくれてます。なにか使命感みたいなものも感じたと言ってます。やっぱり人間って、環境によって変わるね。周りがああなると、奮い立つものがありますね。行かなきゃ、と思いました。

自分がボランティアをすることは考えませんでした。むしろ、ボランティアの人と話をすることに感動していたんです。何かすごい尊敬するわけ。その人たちに魅力を感じて。すごいなと思って。勉強させられましたね。立派な人がいっぱいいたね、あのとき。今でも、あの人たちどうしてるかなとか、思うことがあります。学生さんでも社会人でも仕事を休んで行きますとか、そんな人ようさんいてはった。そういうのに感動しました。だから、すごい撮りたくなって。

震災ボランティアをテーマに撮影していたのは、だいたい半年くらいですね。そのあとは、別のテーマでもまったく撮っていません。おばあちゃんの介護をするなかで福祉に興味を持つようになり、勉強したくなったのです。保育ももちろん、福祉の一分野だったんですけど。まず、ヘルパーの資格を取って、そのあと大学の通信課程に編入しました。とくに夫には相談していません。今は、知的障害者施設の支援員です。

震災はあんまりね、覚えてないですね。もう昔のことです。振り返って震災の体験というのは、隣近所の人と仲よくなったということかな。気にするようになりました。お向かいが何か植物を植えてたら、「わっ、すごい頑張ってるやん」とかね。「どうやってしはったん。」とか。そんな会話もできるようになったしね。

今の仕事は自宅の近くなんですが、夜勤なんです。1 年半になります。だから、家族の様子をあんまり知らないんですよ。家事は、今は夫がやってくれることが多いです。はじめは、出勤前に晩御飯をつくってたんですが、あんまりにもしんどいやろ、それはやり過ぎやからって、夫が「何とかするわ」って。

私ね、保育士してたでしょう。保育所って 6 時半まで開けないけません。ほんなら、それから帰っとったら 7 時になります。夫は 5 時で終わるから、当時も夕食の用意をしてくれてました。私は商売人の娘なんです。だから、わたしにとっては男が料理するのは当たり前で。夫も、好きなんだろうと思います。「僕の職場の人は料理しないんだって」って。買い物もしないんやって、って言うて。「あ、そう」で終わりやけど、やっぱり職場で話したら、自分は他の人のやり方と違うんちゃう、いうこと気がついてるみたい。うちでは、家事役割は、固定されていないんです。おばあちゃんの介護していたときは、わたしが家にいたから、家事を担当してました。今の仕事を始めて、また役割がきれいにひっくり返った。

夫は、自治会活動もよくやります。家族は全然興味示さないけど。盆踊りのときマイク

握ってるの、夫です。家族それぞれ活動領域が違って、夫は地域で頑張ってます。運動会の準備とか。今日インタビューある、って言ったら、行ってらっしゃい、で終わり。

子どもたちのことも、やっぱり心配なこともありますけどね。みんな大人だし、もう言うことありません。昔から、進路のことでああしなさい、こうしなさいじゃなく、自由にさせてきました。夫もそうです。家族は、仲は良いけど割にあっさりしてますね。

（2008 年 7 月 7 日）

○C さん

子どもは 5 人いて、ふたごは 3 番目と 4 番目です。

多胎育児支援を始めたのは、もともと震災のときにね、うち水が出なかったんです。そうしたらうちの近所で、池からお水を運んできてくださった方がいらして。池の水だから、トイレに流したりならできる、飲料水としては使ってはだめだよって。大したことじゃないと思ってやってはるのよ。農家の方で、畑でまくような池の水やと思うの。水ないって聞いた、池の水でも役に立つと思った、タンクに汲んで車に乗せてきてくれて、「欲しい人」って、公園のとこで言ってくれた。それを一つもらったんですよ。

お水をもらってすごく助かったので、自分に何かできないかと思って考えた。まず市役所の知り合いに電話して、何かお手伝いできることないですかって言ったら、即、避難所に詰めてほしい、物資も来るし、ボランティアも来る、それを仕切る人間がおらへんから来てくれって言われて、「ごめん、私ね、5 人子どもがいて、一番下が 8 カ月なのよ、動けないの。」って言ったら、「ほな、自分で動けること考えてやってくれ。」って言われて、確かに、そらそうやなと思って、指示待ちではいけないと思って。

で、ボランティアセンターの方に電話して、何かできることありませんかって言ったら、おにぎり何個だったら出せる？母子寮へおにぎりと救援物資をできるだけ届けてくれって言われて。赤ちゃんもいるだろうし、おむつも要るだろうしってことで、紙おむつとか粉ミルクとか、そのころ友だちみんな下の子がいたり、おむつが家にあったりしたから、そういうのをみんな出して。

震災の 4 日後に、まだうち水が出てなくて、給水車が来てるような状態のときやったけど、「救援物資を出すぞ。」ってみんなに言ったら、いろんなものを持ってきてくれて。それをうちの主人と小学校 3 年生の長男で運んでいった。長男には震災の現場を見せておきたかったんですね。ほかのお父さんたちも、息子 3 人とお父さん 3 人と、2 台に分乗したんやったかな。行ってくれて。そのときはとにかくトイレも何も借りられないから、全部自分たちで解決しないといけないボランティアだということを言い聞かせて、何か出されても食べたらだめよ、自分たちのものはおせんべいぐらいしかなくて、それだけ食べて行くのよって。震災のときのボランティアは、仲間を集めて、いろいろ活動しました。どんどん巻き込んでいく。巻き込んでいったら、結構楽になると思う。ボランティアは一人でやるもんじゃない。でも、そのやるって言い出しっぺがいないと、できないものなの。言い出せば、後は勝手に続くんだと思ってる。

多胎育児はとにかく情報がないから、ベビーカーひとつ買うのにも、いつ買っといたらいいかとか悩むわけですよ。そういうのが例えばサークルができて、使い回しができたりとかしたらいいんじゃないとか、服もそうだし。一時しか要らないものを、同じサイズを常に 2 枚そろえなきゃいけないのが、大変なんですよ。よそでも使ってもらえたらいいし。結局うちも、そうやってふたごさんからもらった分も多かったから。

最初、ボランティアやりましょう、みたいな大それたことを思っているわけじゃなかった。単純に保健所に健診に行くのに、前後ろにおんぶにだっこで、エレベーターに乗って、健診行って、だれも助けてくれない。今まで上の子のときに、1 人の子を連れていくときは何も思わなかったのが、この状態になったとき、だれも助けてくれない。重くなってき

たら 10 キロ近くになってくる子もいるでしょう。2 人はこたえますよ、前後ろに。

その状態で健診に行き続けて、めちゃくちゃ腹がたってきて、それで次、5 番目のときに一人連れて悠々と行って、で、ふたごちゃん連れている人に、「私、抱いとったげよか、うちもふたごいるから。」って言って、そしたら預けてくれる。「ふたごいるから。」って言わなかったら、預けないと思う。「私も上ふたごだから。大変でしょう、抱いとくよ」って。「私、もう終わったし」、「いいんですか。」みたいになってくる。その助け合いをやらないと、これはいけないなと思って。人手があって困ってない人はいいけれども、あいてたら健診につき合ってあげようとか、そういうのから始めた。何かできることをしようと。わたしが勝手に思いついて行動したまで。別にしなきゃいけないことでもないし、よく若いふたごのお母さんに言いますけど、私たちのときにはサークルなかったんだからねって。信じられないって言う若いお母さんもいるけど、なかったんですよ。みんな、してもらってないし、嫌な思いをいっぱいしてきたでしょう。個人的にお世話になった方もいるけど、その人たちに何かで返そうということ以上に、次の若いお母さんたちを助けたい、と思うのは何でしょうね。何か変えたいのよね。

震災がきっかけよね、結局。震災の前は、本を書こうかなと思ってた。どうやったら、妊婦さんに情報が伝わるかと。果たして本屋さんが置いてくれるだろうか、と思ってました。私が本を出しただけで、個人的に例えば出したとしても、多胎妊娠された妊婦さんの手に入るような本になるだろうか。ニーズが少ないから。そのために本屋さんが置いてくれるんだろうかと。これはいかんなと思って、何かでやっぱり有名ならないかんとは思ってた。

（2009 年 1 月 8 日）

○D さん

主人は、息子が中学 1 年生、お姉ちゃんが中学 3 年生の時に、病気で亡くなったんです。息子は、お父さんがいなくなったら自分が男やから、お母さんを守らないかんいう姿勢がものすごく強かった。やさしい子でしたから。亡くなった主人と姑、長男と長女で暮らしていました。

わたしは、主人が亡くなる 5 年ほど前から勤めに出ていました。もう 40 になったらなかなかしごとってないでしょ。ちょうど 40 歳のときたまたまね、積極的に探してはなかったんだけど、自宅のすぐ近くの会社が、求人してるよって知人が教えてくれたので、「あ、いいチャンスだな」と思って。定年まで、15 年間お世話になりました。

家族の中で、しごとに出る出ないでもめたりは何にもないんです。おばあちゃん（引用者注：夫の母）もあっけらかんとしてるから。「あんたがおしごとに出んねやったら、朝ごはんの片付けとか洗濯とか掃除なんかは、おばあちゃんしたげるからね。あ、行っておいで行っておいで」みたいなもんですよ。主人が病気がちだったから、経済的にはしんどかったけど、どないかなると思ってました。そやなかったら、もっと体悪うしてますよ。こないして今までね、地震で傷めたとこ以外は別にどこっていう事もない。

震災当時は、息子とふたり暮らしでした。姑は娘さんと暮らし始めて、長女は結婚して近くにいました。人が亡くなる前には、なにかおかしなことがあるなって思うのはね。震災の 3 週間くらい前になるかな。息子と話してたら急に、「お母さん、僕より先に死なんといてな」って言うたんですよ。「先に死なんといてって、物事は順送りでお母さん年寄りやから、お母さんが先に死なないかんでしょう。それどういう意味？」って。「お母さん死んだら僕どうしていいか分からへん」、「しっかりしたお姉ちゃんがいるやないの」って、「お姉ちゃんと相談してしなさい、何をつまらん事考えているの」って言うたんですよ。その横顔がね、ものすごい姿が寂しそうだったの。えーなんでこんなこと言うの、と思って、私はそれはずーっと頭の隅に残ってたのよね。

それでその後、地震よりちょっと前にね、畳だったリビングルームをフローリングに替えて、家を模様替えしたんです。そうしたら息子が、「お母さん、何にも家具のないところへ僕寝たいから」言うて、テレビとオーディオセットがあるだけのとこへ「ここ提供してくれる？」って。「うん夜だけよ」言うて。2 階に自分のベッドがあるのにね。「水害でも地震でもね、1 階に寝てたら逃げやすいでしょう」って言うんですよ。もう、好きなようにさせといたらいいわと思って、それで私はその隣の部屋に寝てたの。

地震が起こって、真っ暗闇やから、私は交通事故にあって目が見えなくなったんやなって、身体打ちのめされてこんなに動けないんだなと、それだけしか思ってなかった。「目が見えなくなったな、どうしようかな、あーそれでも目が見えなくても生きていけるか」っていうような、そんな感覚で我慢してたんです。

わたしはね、ほんとに子ども主体に生きてきてるでしょ。だからまさか息子が死んでるなんて思ってない。生きていると思ってた。それにしたら声がしないなと、ふっと頭をかすめた時あるんですよね。普通だったら息子は、わたしが検査入院しても飛んでくる子やったからね、どうしてんのかなと思って、病院のベッドで意識がもうろうとしている中で長女に聞いたら、「あの子まだ寝てるよ」って。これは後で聞いたんですけどね。長女によ

ると、わたしはえらい怒ったような声出して、「あんたのんきな事言ってないで、はよ起こして来てやって」って言ったらしいんです。長女が当時のそんな話をするようになったのは、震災から 8 年くらい経ってからですかね。ずいぶん後になってからですよ。お互いに、触れたくなかったんでしょうね。

長女は当日、5 歳と 3 歳の子を連れて親子 4 人で避難所へ行って、帰り道で木造の家がみななぎ倒されてるのを見た。それで、長女の夫がバイクで見に来てくれたんです。「あかんあかん、どうしようもないで！」というので、向こうの両親に子ども 2 人預けて、飛んできてくれたんです。

助け出されてから、3 ヶ月間入院しました。3 ヶ月経ったら避難所も入れない、仮設も入れない。それで娘がね、「役所へ行って頼んだって簡単にいくことやないし、もうおばあちゃん、ここで一緒に暮らしたらいいやないの」って言ってくれた。その後、翌年の 5 月には一人暮らしに戻りました。自分の荷物とかお仏壇のこととか考えましたね。何よりね、やっぱり長女のとこにあまりにも負担掛けすぎてもいかんと思ったんよ。お嫁さんやったらそんなん言えないけど、娘やからね。現実には、やっぱり自分で経済的なことも考えていかなかったら。ポコッと死ねたらいいですよ。そない言いながらこれ 14 年生きてるんですからね（笑）。

それと、欲が深いのよ、もともとね。何かをしないとおられないのよ。3 年か 5 年しか生きられへんと思ってたから、あせりがあったんですよ。なんか世の中の役に立つことを…私はいろんな思いをして、長時間かかって私を助け出していただいた。そのことに対してね、私がこのまま人生を終わってしまったら申し訳ないなと思ったんは確かですねん。「震災の語り部募集」いうて、小さい紙に簡単に書いた紙がポストに入ってたのよ。それを見た時に、「ああ、私は身体の自由がきかない、まあ自由きくのは口くらいや（笑）、口なら使えるかな」と思って。

震災で家族を失った人は、家族の想い出をたくさん持ってはると思うんですけどね、わたしの場合は気の持ちようでね、あの子に泣かされたことはないと。やさしかったから、それだけでも幸せだなと思って生きていかないかんなという思いはいつもありますよ。いい思い出しか残ってないからね。それで息子死んだと思いたくないの、いまだに。亡くなった姿も顔も見てないから。だから、夕方になったら「お母さん、ただいま」って帰ってくるんじゃないかなと思って。犬が玄関に行ってね、尻尾を玄関のドア叩きながらパタパタしてたら、息子が「ただいま」言うて入ってくる。その、生きてる時の光景しか思い出さないことにしてるの。じゃないと、悲しみだけ持ってたら生きていけませんよ。地震から後に時々思ってたんは、順番からいえば、息子が生きてて私が死んでて当然でしょ。そうでなかっただけに、やっぱり悔いが残ってる。なぜ私が死んで息子が助からなかったかなとね。その思いが強いから、それだけは悲しいです。

でもね、子どもさんたちの感想文見たら、やっぱり「ああ、語り部しててよかったな」って。「今、親孝行してちょうだいって言ったって、勉強、勉強でしょ」言うて。「だから、何にも親孝行できなくて当たり前になってるけど、その当たり前の中で、行動できなくても言葉でね、『お母さん、何かお手伝いしましょうか？』その一言だけでもね、お母さんしてもらえなくてもその言葉だけでも親って満足するんですよ」って。それで手伝えたら上々。「うちの息子みたいに、地震で瞬間にもう命を失ってしまったら、何をしたくでもできな

いでしょ。それを考えた時に、やっぱり普段からね、やさしい気持ちを持って親に接するということが、あなたたちの一番の親孝行ですよ」って。

気持ちを内にこもらせていても辛くなるばかりだから。だから人に話することによって、自分もいろんな意味で考えさせられるとこもあります。話してても天井向いて話しませんからね、やっぱりお客さんの顔を見ながら反応を見ながら話するでしょう。

わたしが語り部をするのはね、まず、亡くなった人の供養になるということ。それから、自分の心の支えになるということもあるんですよね。語り部でなかったら、外へ出向くことも少なくなると思うんです。

長女は、わたしの語り部活動に協力的です。視力がだいぶ落ちてるし、「これちょっとワープロ打って」言うたら、孫でも娘でもしてくれるんですよ。それで、「おばあちゃん、ここちょっとおかしいよ」って。「あ、そう？ほなちょっと訂正してちょっと書き直しといて」って言ったら、「そやけど、おばあちゃんの言葉と違うから、おばあちゃん考えたら？」とか言ってね。そういう協力はしてくれますよ。

わたしね、空襲で姉が殉職してるんですよ。わたしが 12 歳、姉は 22 歳でした。それこそ自分の子どものようにかわいがってくれたんですよ。だから、母と同じような感覚でわたしは姉が好きだったから…。空襲で亡くなったり、地震で亡くなった人の命の重み。私が語ることで、亡くなったたくさんの人の供養になるかもしれない、と思いはじめたのがきっかけで、私は無理はできない身体だけど、週に 1 回くらいなら何とか動けるから、これは続けていくべきだな、と思っています。

（2009 年 1 月 14 日）

〇E さん

こんな大きい地震が来るなんて全く思っていなくて、避難所ということもまったく考えなくて、「あっ、ひょっとしたら学校行ったら何か分かるかもしれない」って思って学校行ったのが初めてですよ。避難所やという意識はなかった。教室はみんないっぱいで入る隙もないですわ。体育館もいっぱいで。行列がずらーっとできてて「これ何の行列？」って聞いたら、お弁当配っとうって言うんですよ。当日の午後ですよね。ハッとその時に「何も食べてないやん」「これから食べるものないんや」というのを初めて自覚したんやね。多分緊張してるか何かで空腹感じなかったんですね。家族に何か食べささなあかん。「えらいことや、今晩から何も食べるものないやん」と思って帰ったら、その晩に同じマンションの友人が、「ご飯を炊こう」と。ボーイスカウト経験者の子が火をおこして、友だちがご飯を炊いて、私はお手伝いして、その次からみんなが「お手伝いしたら何か貰えるんや」っていうことで、何かね、みんなやっぱりお母さんが家族に何か食べささないかんと思うでしょ。ほんならみんな奥さん方が「手伝います」って自然に集まって、私と友だちが中心になって炊き出し班みたいになったんです。そうして、マンションの集会室が避難所指定された。

震災当時は夫と長男、次男の 4 人家族でしたが、長男は会社の寮が県外にあって、「お母さん、仕事しばらく休んでいいからおるから」って言ったんです。でも、家がちゃんとしててお風呂もあって食べられるものがあるとこへ 1 人でも行ってくれた方が、親としても安心やから。「会社の寮に戻って」って言って、帰ってもらったんです。1 週間、10 日ぐらいしてから。あと「こっちは何とかするから」っていう感覚だったですね。

もう私あの時、家族が何してるかさっぱり分からなかったです。家族 4 人命無事だったでしょ。そしたらね、無事だったということだけで、もう本当に誰が何してるか全然分からなかったです。次男は、ボランティアで避難所運営に関わってました。主人は 1 週間後には出勤しました。会社が大阪にあったから。みんなバラバラに自分のことで精一杯っていう感じで、私は炊き出しで精一杯。自分はもうクタクタでもしなきゃいけない、と思ってやってる。それを見てて、家族は自分たちでしなきゃいけない、と思ってたかも分かんないね。主人はもう黙って仕事へ。一週間後にもう歩きながら大阪まで。それで主人に、「お願いやから、出勤したらお風呂屋さんでお風呂入ってね」って。こっち帰ってきたらお風呂ないし、もう「自分のことは自分で大阪でしてきてね」って。大阪って全然普通やから。クリーニングも大阪で出してきてね。それまでは、ちゃんとクリーニング出して、新しいのちゃんと毎日換えてってしてたやん。それが一切「パパ自分でしてね」って言って。せざるを得なくなってるんですよね。

今から思ったら、主人の方でもわたしの方でも実家へ帰ろうと思えば帰れたんですよね。よそへマンション探して、行こうと思えば行けたんですよ。でもわたし、何か自分の気持ちの中でね、これはわたししか分からないことなんですけど、他の人みんなが行き先決まってから、自分が最後にここを離れようと思ったんですよ。無意識のうちにそれがあったの。主人だけでも大阪で仮住まい、とかは話題にならなかった。もう、暗黙の了解で。主人も、早く引っ越し先を探そうとか、一切言わなかった。どうしてかわからないけど。ふだんは、たいてい主人がなんでも決めるんですけど。

家族お互いはバラバラ状態で。語り部するようになってからね、初めて気がついたんですよ。家族でそういう震災の話したことなかった。家族は何しとったんやろ、って。本当に知らなかったです。わたしは炊き出ししてるし、次男は避難所運営してるから、親子で隣どおしでやってるんやけど、ご飯食べに来た時しか顔会わないですよ。話もほんまする間ないんですよ。次男は避難所で寝てたし、わたしと主人は、長男の 2 人用テントで寝てた。だから、生活みんなバラバラでしたね。それでも、夫は大阪から毎日帰ってきて、炊き出し食べて。

で、マンションの他の人たちが行き先決まってから住む場所を探し始めて、自宅の近くのマンションを借りたんです。震災で 4 ヶ月くらいテント生活して、改めて普通のマンションに入りましたよね。そこへ入ったら、普通の生活が戻ってくるはずでしょう。ところが、そこへ入って安心した途端に、耳鳴りがするわ、うつ状態になるわ、不眠症になるわ、ドワーときたんですね。それで通院もしたけど、今でも家族には言ってない。当時、薬飲んでいたのも知らない。家族は、元気になっていると思っていたと思うわ。

語り部を始める、と言った時は、長男は「自分の体験したものをちゃんと人に伝えるような話ができる人は少ないよ。お母さんはそれができるんだから、やったらいいんじゃない」と言ってくれた。なんか力になってね。そんなぐらいかな。主人は、何しようと好きにしなさい。昔から、ずーっとそんな感じ。だから、私が専業主婦しながらおはなしひろばやろうが、児童文学やろうが、好きにしたらええって感じ。

私ね。子どもが小さい時から地域のいろんな子を集めたり、いわゆるボランティアと言われるようなことをしてきて、次男が「僕はお母さんみたいに損するばっかりすることはしない。お母さんみたいには僕はならない」って言うたことがあるんですよ。私を批判してね。自分がやっぱり他の子どもらと一緒にされるから、自分のお母さんなのに、みんなのお母さんみたいになっちゃうから、嫌だったんでしょうね、きっと。僕はそういうのはしないぞとか言ってたのに、震災の時に、お母さんがやってたことのほんまの意味が分かったと言った。うれしかった。次男自身もボランティアで避難所運営に関わるなかで、多分まわりの人のことばがあったんじゃないかなと。「お前はええお母さん持っとるな」「大事にしたらなあかんで」って言われたらしいんですよね。みんなの中にポンと入った時に、人間って何がほんとの価値なんやというのを勉強してくれてよかったなと思うんです。

次男は震災の時に、やっぱり家族というのを改めて見たと思うんですよね。一人ひとりをこう。母親を別の角度から見たし、「僕はあの時お兄ちゃんがすごい人やと分かったんや」と言うんですよね。ふたりで歩いてたら、ガスが充満しているところがあったんですって。みんな逃げているんですよね。道端で女の人がおんおん泣いて、「助けて、助けて」って言ってたんだって。ガスが充満しているところで家が潰れているんですね。家族が埋まっているから「助けて」って言ってるんだけど、人がまわりにいなくて。次男は、やばいって思って、早く逃げなくてはと思った。で、そう思った時に長男を見たら、もう中に飛び込んでたって言うんです。あの時に僕はやばい、逃げよと思った。でもお兄ちゃんはすでに潰れかかった家の中に飛び込んでいたって。そんなんも 10 年以上経ってから聞いたんです。私も語り部をやらなかったら聞かなかったかもしれないし。自分も言ってないし。自分の苦しみを家族に見せてないから。だから、家族は分かっていたかもしれないよね。分かってて黙ってくれていたかもしれないし、私の口からは言ってないから、知らないかも

しれないし、今も言う気はないし。今があるんやから、今が穏やかなんやから、これでいいって思ってる。

（2009 年 2 月 2 日）

OF さん

地震…震災体験って言われてすぐに浮かぶのは、自分の身体で体験したいうのが初めてだったでしょ。ちょうど外にいて、直かに土に足着いてる状態だったので、恐怖はもうどうしても忘れられないですね。それと、避難所生活ですね。11 歳と 9 歳、1 歳の 3 人の子どもと、おばあちゃん入れて 5 人。畳 1 枚のスペースで 5 人が住んでたんですよ。一番下がまだ 1 つで夜泣きするんで、一番下とわたしだけ、わたしの父方の里に行って。避難所生活始めた頃はね、みなさんもう精神的に普通じゃないでしょ。だから、本当些細なことでもやっぱしこうピピピとなるんですね。で、うちまた小さいから余計に夜泣きもするんで、だからもうなにか言われる前にどいておいた方がいいかなという頭があって。主人と相談して決めたと思いますね。だから、3 人…おばあちゃんと子ども上 2 人で寝てましたね。主人はもうずっと消防団の詰め所でした。

ちょうど地震の朝はね、おばあちゃんがよそに泊まりに行ってたんで、家には子ども 3 人だけだったんです。それでもう慌てて帰った時も、今みたいにこんな立派な道じゃなくって、本当に細い路地で、その路地に瓦が全部落ちてるでしょ。進めないんですよ。だからすごい時間かかっちゃったんですけども、家に帰ってきたら、子どもたちは一番上の子の布団に 3 人くるまって待ってましたね。主人は、一番遠いとこ配達するんでね、帰ってくるのも遅かったんですけど、まさかこんなにひどいことになってると思ってなかったから、そのままずっと配り終わって帰ってきて、それでもう自分はすぐ消防行かなあかんいう頭があったから、「すぐ避難所行け」言うて、それだけ言ってすぐ行きましたね。

もうその時は、主人が消防団に行かなあかんのは分かってる。しゃあないから子ども連れて避難所行ったら、みんな知った顔がいてるし…。だから、家族を放って消防団に？とか、疑問は持たなかったですよね。当たり前でしたね、その、みんなで…今までも言われてますけど、ここの地区いうのは、みんながよく知ってる同士やから。どこの家のどこに…って消防団もみな分かってるんで。

私も主人も商売してるんで、いつまでも商売休んでられへんから、新聞配らなあかんでしょ、とりあえず。2 枚 3 枚のペラペラな新聞ですけどきてたんです。えっと、翌日か翌々日くらいから。それを、私もホーッとしちゃってすごいショックやったから、1 週間ちょっとほどね、配れなかったんですよ。新聞がきてても、避難所にだけポンポンと置いて、宅配はできなかったんですよ。町中はもう誰もいないんで配られへんねんけども、そんなに被害が少ないところはみなお家にいてはる。言われたんですよ、お客さんに。「新聞ね、配ってほしい。待ってるねん」って。だから、その声聞かせてもらって動けたんですよね。ちゃんと動いとかなあかんやん、仕事しとかなあかんいうて。だから仕事、新聞してて助かったことですね、それは。本当にしてなかったらいつまでボーッとしてたかちょっと分かんないですね。

その間、主人はずっと詰め所です。だから、主人は避難所で寝泊まりはしてないですよ、全然。ずっと詰め所ですからね。当時は、もう全く別行動です。わたしは、夜一番下の子連れて父親の里へ行って、朝にまた 2 人で戻ってきて、子どもを避難所のおばあちゃんに預けて、車は無事だったんでバンの後ろに仕事積んでしてましたね。新聞の名簿とか集金とかあるでしょ。

私実家のお父さんのこと、当日はもう全然浮かばなかった。もう目の前に起きたことで精一杯で。後で知ったら、実家は潰れたけども空間ができてて、ちょうどそこにお父さんははまったから、自分で素手で天井裏破って出てきたの。誰も助かってると思ってなかったけども、助かってた。当日は、だから電話するのも思いつかなくて、兄が神戸にいてるんで、「お父さんは大丈夫かな」という頭はなかったのに、お兄ちゃんとこが…神戸ひどかったでしょ、「お兄ちゃんとこは大丈夫かな」いうてお兄ちゃんとこには電話したんですよ（笑）。お兄ちゃんとこはまあ無事やいうことで、ほんでそこで初めてね、「おやじは？」って聞かれて、「あっ、ほんまや、お父さんとこ行かなあかん」思って、電話しても電話通じないからね、近所に電話したんですよ。そしたら「家は潰れてもうあれへんけども、お父さん無事でおるから」いうことを聞いてね、「ああよかった！」いうて。親不孝なもんで…（笑）

一番後にできた仮設に入ったんかなあ。1 月に地震があって、仮設に入ったのが 2 月か 3 月。うちは車で移動可能だったんで、まあ遠くてもいいや思って遠いとこ…「もうそれでいいです」言うて。だから、そこを選んだ人はちょっと遅かった思いますよ。4 月から…1 歳児ですけど、子どもを保育園に預けたんです。その入園式の時はもう仮設にいました。そんなに早くから預けるつもりはなかったんですけど、家の片付けもあったし、店…商売のこともあったし、その子に付きっきりで見とられへん。片付けなんかは普通の仕事じゃないんで危ないんでね、一緒におらせるわけにいかないんで、もうそうしたら預ってもらおうかいうかたちで。

仮設では、お正月を 2 回しました。お店を持つのに仮設の近くで土地借りてたんですよ。それでも、元のとこで仕事をしたい、子どもの学校も遠いし不便やからいうことで、区画整理が入ることはわかっていたんですが、それを承知でこの同じところに建てたんです、一応。子どもたちの通学に不便なことと、もともと商売の中心がここにあるんで、商売上も不便だったことと…かな。やっぱし、帰りたかったんですよね、みんな。

仮設だと、住まいは住まい、仕事は仮店舗で…いう感じで、みんなで行動できる時間がなくて。行動するところが別々で、晩御飯くらいですよね、家族が一緒におれる時間いうのは。とにかく、家族 1 つ、ひとともに 1 つにいたかったんですよ。ここから「行ってきます」で「ただいま」と帰ってくる、そういう場所が欲しかったですね。ここなら、仕事してても子どもが帰ってきたら分かるし…。そういう空間がすごく欲しかったですね。そういうとこはうちだけじゃなかったですよ。だから、2 回新築したおうちは何軒かありますね。1 回新築して、また違う仮設に入って…。そういう決定は、ほとんど主人が決めましたね。うちは、みんなで話し合っていうんはあんまりないですね。「こうしようか」いう主人のその声だけで、「じゃあ、そうしたらどうする？」とか「こうする？」とか言って。

経済的に、もったいないとは思わなかったです。いや、現実的にはすっごいもったいないですよ。補償金いうのは多少出ますけどね、それじゃないんですよ。どうせ建てるんやったら、もうちょっと向こうで我慢して…いう頭もないことはなかったですけど、ほいでもやっぱりね、こっちに帰ってきたかったですね。知った顔がようさんおって、生活がここ基盤であって…。

地震の影響は、経済的にはだいぶ大きいですね。もともと古い家だったんで、建て替えは頭にあったんですね。そやけど、私らの代でできるかな、ひょっとしたら子どもの代に

任せなあかんかなくらい言ってたくらいなんですけど、それが 2 回も新築しちゃってちょっと…ローンだいぶ抱えてますからね、そりゃあもう経済的にはきついですね。でも、うちだけじゃないんでね、それはもうみなさんどこでも一緒やったと思いますよ。

家族で地震の話は、ほとんどしないですね。直後はお父さんと一緒じゃなかったけど、「どうしてたん」ということもない。主人は、子どもに甘い方じゃないんで、割と放ったらかしの方なんで、子どももお父さんに甘えるいうのはそんなになかった。

今、一番下の長女が高校受験をひかえてるんですね。お父さんはね、近くの高校でええ、言うんです。でも本人は、バスで 1 時間ほどの、わたしや兄の出身校を受験したいと思ってる。本人がやりたい部活動がそっちにしかないんですね。それに、わたしや兄から話、よう聞くんでね。近くの高校は、お父さんの出身校なんだけど、しゃべらないでしょ、お父さん。自分の思い出とかいうの、しゃべらへんので。本人はもう決めてるんでね。主人は言ってるだけなんで。

それも、主人からは言いません。こっちから振るんです。三者懇談会があって、こういうふうに話が出たけど、子どもはこういうふうに思ってるけど、そんでええか、いうてこっちが聞くんです。聞いたことに対して、近くの高校でええやんか、とか。いや、ほいでも向こう行きたい、言うし、いうて。最終的には子どもの意見尊重しますんで、主人もそれは反対しないですね。

父と子の会話は、長女は割と直でするんですけど、上の 2 人の時は、まだお父さんも若かったですし、本当になかったですね。お父さんが子どものバギーを押したんは、長女が初めてなんです。上の 2 人の時は、全然ね、触らなかったんで、一番下の子乗せてついて行った時に、言われたんですよ。どないしたん、て。だから今でも、電話があっても、すぐに「お母さんに代わって。」世間話もしないです。

こういうインタビューを受けるということ自体がね、特別なことじゃないですか。普通の生活してたら考えられないでしょ。だから普通じゃないことを体験したんやなあ、いうことは改めて思いますね。それでも、普通じゃないことを体験しても、こうやって毎日くらしていれば、それが普通のことになる。

震災公園が近くにあって、毎年 17 日にはあそこでセレモニーするんですけど、テレビで見ることは見るんですけど、なんかよそごとっぽく思いますね。東遊園地とかみな映るでしょ。こういうのあったんやな、いう思いはあるんですけど、どこかよそよそしい感じはするかなあ。知り合いに亡くなった方いるんですけど、身内からとか家族から亡くなった方が出なかったせいもあるんやと思うんですけど。積み重ねでしょうね、やっぱり。地震からこっち、生きていかなきゃいけない、ずっと歩いてきた道があるんでね。やっぱり地震の直後から考えたら、薄らぐいうか、だんだん今になってるいう感じで、どういうてええか、言葉にできないんですけども。

地震からこう歩んできたのが、そのまま人生の道になってるんで、もう地震がなかったらいうのは考えないですね。あの年に地震があって、みんなで避難生活してきて、仮設行って、家建てて、学校やって、子ども育てて、仕事して、今になってるいう感じ。だから本当に地震込みの人生ですね。この 14 年で一番印象深いのは、なにごともなかったことですかね。

当時は大変でしたんでしょうね。大変でしたね、確かに。仮店舗でやってた時とか、今

思ったら苦労倍じゃきかないくらい、あったんやと思うんですけど、その当時にしたらそうするのが当たり前やったし。のど元過ぎればでね、避難袋とか、ああいうのは一切ないんですよね。準備、1 回もしてないです。地震があってもすぐ避難所行けて、不便はあったけれども、生活はさせてもらったから、どういうんかなあ、あんまり危機感もってないいうかなあ、ちょっと薄いんかなあ、いう思いはありますねえ。

（2009 年 2 月 10 日）

〇G さん

震災の前の 11 月、妊娠して 23 週の時にたまたま検診があって、その時に病院に行ったんですけども、もうお腹が張って生まれそうということで、すぐ入院して点滴して寝たきり、トイレだけ行っていいということになりました。先生がなんとか「32 週までもたせよう、目標にしよう」と言いはったんですね。それで入院することになりまして。そこから 24 時間持続点滴で、それがまた痛いんですね。

震災の日、5 時半に目が覚めたんです。火曜日は採血の日だったので、「あっ、6 時から血を採られるわ。トイレに行っておこう」と思って、5 時半によちよちという感じでトイレに行って、やれやれと思ってまたベッドに座って、メガネはずして、横になったらドカーン！となって…。地下が爆発したかと思って…。地震だとは思わなかったんです。病室は 6 階だったかな。「ああ、爆発した！逃げなあかん」と思って、点滴がはずれたら絶対に子どもが出ちゃうと言われていたから、点滴を押さえておこうとか。ナースステーションはすぐそこだったんですが、なんかもう、ガシャガシャガシャと全部が落ちる音がして。ベッドの枕元に酸素があるんですが、それがみんなプシューって、シューッというたと思うんですけど、それがガスかなんか漏れたんかなと思って。水かなんかシャーといって、ドーンといって、ガタガタってなったから、爆発だと思った。

地震とかそんなもん分からなくて、逃げなあかんと思って。きっと火災が発生する、「みんな逃げなさい」と言われると思って。同じ部屋で元気な人は立って外見て、「そこらへんは崩れてへん」と言うんですよね。でも、「自動販売機は倒れている」とか、「そっちはグシャグシャや」と言って。それでみんなで「これは地震や！」ということで。看護師さんが全部まわって「大丈夫や」と言って。しばらくしたら先生が家から来たみたいで、「道路がボコボコや」と言いながら。それからですよね。

冬で寒いでしょ。暖房が切れて、「今持っている服は全部着なさい」と放送が流れて、カーディガンがあったから着て。輸液ポンプで点滴してる人は、電気を使うから緊急性ない人はいったんはずしたんだけど。私は、手動に切り替えると言いはって、なんかこうポタポタのやつをタイム計りながら計算してるから、合っているんかな？とか思いながら。ちょっとましな人はどんどん帰されていって、「家にゆっくりおって、もしなんかがあったら出てきなさい」という感じで、他の病院からより大変な人が来る感じで、それまで仲良く「（引用者注：地震動で動いてしまった）ベッドを元通りに直したるわ」とかって言ってた人が、行っちゃうからそれでもう…つらくなって。

それでどんどん違う人が来て、夜中もどんどん大変な妊婦さんが来ている感じがあるんですよね。それで分娩室を全部つぶして、そういう人の病室になっていくんですね。そこは小児病棟にもつながっているから、その家族の控え室、亡くなったお子さんの家族とかが来て、泣いているって、同室のみんなが…。私は行けないから部屋にいるんだけど、みんなが教えてくれる。「頭をなんかして亡くなったらしいよ」とか言って…たくさん子どもも亡くなったんですよ。そんなことがあったからかもしれへんけど、余計お腹が張ってきて、点滴が今までの量では足りなくなって。筋力を弱める薬が入ってるみたいで、立ってトイレに行くのがもう力が入らないかもしれんから危ないといわれて、いよいよトイレも立っていったらダメになったんですね。そしたらもう、震災で亡くなった方もいるから、

そんなことは言ってられへんかもしれないけど、ほんとトイレ行くのも寝たままでナースコールしてオマルをお尻に入れてもらって、それでまた拭けないんですね。お腹が大きくて届かない、手も点滴も痛むし。それをまたナースコールして、「出ました」って言って、それで、震災直後だからすごく看護師さんが忙しそうで。考えながら「今いいかな」とか…。「ああ、なんか情けないな」というような、ずっとそういうのが続いて。

それで、看護師さんもどんどん代わってしまうんですよね。大変な部署にまわされたりするから、震災で機能していないところの看護師さんがこっちを手伝いに来たりもあるんで。それで「しんどい」と言ったら、新しく来た見知らぬ看護師さんが「もっと大変な人がいるんだから」って言いはったんですね。それがまたなんかちょっと悲しくなっちゃって。もうだんだんこう生まれそうになってくるし、なんかだんだん食べられなくなってきて。みかんみたいなものが食べたいんですけど…ここに点滴があるから、痛くてむけないし、またそんなんも情けない感じがして。

地震直後、主人はナースステーションにすぐに電話したみたい。そのあと電話は通じなくなったみたいなんですけど、ガタッときた、すぐに電話する、って感じでつながって、「みんな元気です」と看護婦さんが言いはったから、一応それで終わって。その後歩いたかなんかで来たんですね。その日はもう会社は行っていないんじゃないかな。「こっちは大丈夫や」とかなんかとか言って、また帰ったり。母は病院の近くなんです。で、歩いてきて「大丈夫や」とか言って、「家は水が出えへんけど、病院は水が出るからちょっと顔を洗わして」とか言って…そんなんです。このとき、励まされたのは、最初からずっといらっしゃる看護師さんかな。しんどい、って言ったら「しんどいね、しんどいね」って言ってくれるから、それかな。夫は入院当初から、震災があるもないも関わらず、ずっと毎日来てくれてたんで、それもよかったかなと…。私だったら逆にそんな毎日行かないで、月水金とか決めて行きそうなんだけど。毎日来てくれたから、別に長いこといるわけではなくて、なんかしゃべって帰るみたいな。夫も交通機関が普通でないなか、大変だったと思うんですけど、それでも毎日来てくれたんですね。会社のビル、いくつかあるうちひとつは潰れた。倒れそうなところに大事な書類があるんで、1 人 3 分ずつ取りに行くことみたいになって、「よ～い、スタート！」みたいなんで行って、「はい、誰それ帰ってきた、次、誰それ。よ～い、スタート！」みたいな、そんなんがあるとか言って。

でも震災直後はなんか夫が心配というより、自分がしんどい。子どものことが全部心配で。今まで必死でがんばってきたことはなんやったんやろかという。この先どうなるかと思って。ここまでしんどいのがなんになるんやろっていう、これやったら最初から別に生まれんかったら、大きくならんかったらよかったんちゃうかなとか。

緊急度の高い人がどんどん来ているんで、保育器がもうないって言っているんですね。みんながそのことを話していて、「保育器がもういっぱいやねんて」とか言って。先生がまわって来はった時に、「保育器がないってみんなが言っているんですけど」って言ったら、「今もし生まれたら、ヘリコプターで運んでどっか違うところに行ったらある」って言うんだけど、またそれ聞いたら「うわあ、なんや怖いな」と思ったり…。でも、そんなことを言っている場合じゃないという感じでね。絶えず大変な人が来ている感じで。どんどん人が変わったり、東灘の方の先生はなかなか来れないとか、おうちがなんかなっているとか言うし。来られた先生はずっと治療にあたっているでしょ。それで子宮筋腫とかの特に

緊急性のない人は断ってる声が聞こえるんです。ナースステーションから、「1月何日に予定だった手術は延ばしてください」といろんな人にずっと電話している。その先生が今度は過労で倒れて「8 階に入院しているねんて」とか言って、それで「えー」と言っていたら、先生が回診で降りて来て、「先生入院しているんですか？」と言ったら、「そうや。で、降りてきてん」とか言って。8 階から 6 階に通ってはるような…看護婦さんもなんかマスクしてしんどそうやなと思ったら、「熱出てるんです」とか言って、うつらんように何枚か重ねてたけど、休めないというのかな。そんな人も婦長さんとか偉い感じの人にいっぱい言われて怒られていたりね、「ああ、かわいそうに」と思いながら。みんなが忙しそう…。そういう状況は、ベッドの上で気配を感じているだけというか、現実感がない。テレビも、あんまり見られなかったと思います。

そうこうしてたら、また点滴が増えて。2 月になって「先生しんどくて、もう私ダメです」と言ったら、「あんた最初からダメやったやんか」と言って、「11 月からダメやったやんか」、「そうですか」と言ったら、「そうや」と言うて、「最初から危なかったけど、まあ持ったな」という感じで、結局 2 月 9 日に帝王切開という話になって。なんとか 32 週。でふたごだったら息ができないんで、それで呼吸窮迫症候群とか、心臓のなんかが閉じていないとかいっぱい書かれていました。車椅子に乗せてもらって見に行って、でもその時は「わあ！」とかいうよりなんかしんどそうなんですよね。管をくわえて、なんかこうミイラみたいにガリガリで皮が引っ付いてるだけ、よくアフリカの…ああ、ああいう子らと一緒やなと、ガリガリで皮だけでこう…その時に「かわいい」とかじゃなくて、「しんどそうや、大丈夫かな」という感じで。それで、何とかいろいろ黄疸が出てるとか、目隠して光を当てたりとかして、どうなるんかなと思ったけど、やっと退院できた感じかな。自分では震災がなかったらもうちょっとお腹の中でもたせられたかな、とか思う。

子どもたちより 20 日ほど早めに退院したんですけど、ずっと寝とかなあかんというのから、今度は切ったら急に起きていいことになりますでしょ。そしたらもう起きれないんですよね。こう必死で触って、ちょっと病院に来るだけ、母乳を絞って持ってくるだけでも、すごい触りながら歩くみたいな感じで、それがまたしんどかったかな。

育児もしんどい。私はまだ実家があってよかったけれども、実家にいても四六時中母に手伝ってもらえない。身体が小さいからちょっとしか飲めなくて寝て、またお腹空いて、みたいな感じで、こっちはほとんど寝れなくて。夜も 3 時間おきが 2 人でずれるんで、分からなくなるから、ノート作って「こっち飲んだ」と夜中メモして、こっちのノートとこっちのノート。「これ、どっちやったかな？」と電気つけてジーッと見て、でもやっぱり寝ぼけて逆になってたりしてたかな。「もう嫌や！」と違う部屋で耳を塞いでたらずっと泣いて。いつまで泣くかやってみようと思ったけど、40 分後くらいには、私の負けやわ、と。抱っこして下に投げつけたくなるし、「私、あんなに子どもを待ち望んだのに、こんなんしたくなるっていうのは、やっぱりしんどいんやわ」と思いました。

自分がしんどかったから、誰かに…聞いて欲しかったなって思ったから、サークルを始めたのかな。なんか、自分ではまともと思って暮らしてるんだけど、テレビのニュースとか見てたらね、赤ちゃんを殺してしまうお母さんは「ひどい人やな」っていう感じやけど、自分も一歩間違ったらしてたなって。別に極悪で暮らしてたわけじゃないのに、危なかったなというのがあって…。いいお手本、ちゃんと子育てしてるみたいなんじゃなくて、「い

い加減でええやん！」。「そんなに真面目に考えんでも、生きとったらいいやん！」「あ、掃除しなあかん」とか、「きちんと離乳食もしなあかん」とかじゃなくって。

最初はお母さんだけ適当に集まって、グチったり、なんかがどうしたらいいのとか、そんなんやったんですけど、だんだんご主人が、「奥さんが入院してるから僕がちょっと様子見にきました」みたいな人が増えてきて。ほんで、すごいお父さん増えたなっていう。最後の方は集会しても男の人が結構いるからびっくりという感じで。

夫婦関係は、役割分担が変わりましたね。家計管理も、子どもが生まれる前のように私が給料を下ろしにいって、主人に小遣いあげて、みたいなことが全然できなくなったんで、主人がしっかり持って、「食費はなんぼや」みたいな感じになりました。今も電気代は何々、みたいな感じ。沐浴指導とかも、2 人で病院で習ったんですね。2 人でしようと思って。そしたら、お風呂は好きで赤ちゃん入れたんですけど、最初はおむつとかがすごく嫌みたいで。それで、「周りに聞いたけど、会社とかでは誰もうんちとかそんなん替えてる人おらへん」って言うんですよね。お風呂入れたり、ミルクあげたりとかしても、自分でミルク作ったりとか、そんな人おらへんて言うんですけど。でも、そこでまたけんかして、「あんたの子どもが今大変で泣いてんのに、どうするんよ」って。「私、今こっちやっとうのに、その子も見て」って感じですごいけんかして。それからおむつも得意になって。ミルクも自分でちゃっちゃっとやって、カーっと振って、消毒までする。全部できる。単なるお手伝いじゃなくって、おむつはどこが安いかとかも分かるし、全部。ゴミとかも最初は私が子どもにずっとつきっきりやったから、生ゴミとかあんなんも全部してくれて。ほんで、幼稚園行くくらいになった時かな、「もうそろそろリハビリしろ」とか言って、私が生ゴミの係に戻ったんですけど。だから、子どもは育てられると、自分ですごい思ってるみたいですね。子育ての戦友みたいな感じ。

震災があって、ちょうど子どもを出産して、すごく大変だったので、空白なんですよね。しばらくしてふっと三宮へ行って、「あれっ！？」って。景色が違うし、ビルも違う。なんか、すごい取り残されたっていうか。多分私が普通に、ヒッヒッフウで 1 人、ふたごでも安産で健康で普通だったら、多分サークルの立ち上げはしてなかったんじゃないかな。

やっぱり、入院中にふたご育ての先輩が誰か来てくれたら。別にそんな生き死にの病気じゃないんだけど。不安って、すごいふくらんでしまうから。そんなとき、大したことじゃない、みたいなことが分かったら楽になれる…。一緒にサークルやってた人も、「うちの子 1 人仮死やってん」とか言って。仮死で生まれてきたって言うけど、すごい元気で野球してるから。出産前に、管理入院で寝てる人はそんなん必死で悩むやろうけど、「今は元気で野球やってるで」って言ったら、それで「あ、大丈夫や」と思えるでしょう。

（2008 年 8 月 1 日）

○H さん

当日は警報が出てて、台風が来るとかって言ってて、雨戸は閉めてたんです。まさか、水が来るなんて。ここには、結婚して 7 年前から住んでいます。自宅は、夫の実家で、当時はお義母さんと夫と子どもふたりの 5 人家族でした。お義母さんは視覚障害 1 級なんです。

台風が来るたんびに、雨戸は閉めてたんです。子どもが怖がるんで。で、停電したらあかんから、過去にも台風が来たときに、何回も停電してたので、子どもも怖がってたし、停電しないうちにおふろに入れました。

で、しばらくすると橋のところからちょっと氾らんしてるとか、消防団に入っている夫が言って。勤め先から 1 回帰ってきて、消防団で出ないといけないからということで、そのまま出て。もう氾らんしてるからって、そこまで来てるからって。夫が行った時点でね。でもまさか、うちのところまで水が来るなんて思ってなかったから。で、大丈夫やろうとかいって、気楽に構えてて。

水が来てなかったから、まだ大丈夫やわとか言って、だれも避難してないしとか思いながら、でそうしたら、一気に水がやってきて。今度玄関をぱっと出たら、もう水がそこまで来ていて、とりあえず玄関に置いてある物だけ上に上げて。もし、床上になったら困るんで、とりあえず大切な物だけは 2 階に上げようということで、1 人で。子どもはとりあえず 2 階に押し込めといて、ビデオでも見とき、って。そしたら水が来て、外のコンセントに水が入ってブレーカーが落ちちゃって、もう真っ暗。もう何にもわからない状態で、必死に荷物を 2 階に上げて。子どもは泣き叫んでいるし。そうしてても、主人に電話してもつながらない。もう電話自体が通じないんですよ。

で、もう、どうしていいかわからへんし、避難するのかどうかもわからへんし、とりあえず、どこまで水が来てるかって、窓から見たら、だれかが通ったんです、水の中をシャバシャバと。あ、主人やと思って、「どうするーん、逃げたらいいの」とか言って。実際は、全然知らない人なんですけど。もう、暗いからわからない状態で。そしたら「知らーん」って。えーっとか思ってたら、もう玄関あと何ミリのところまで水がやってきて。ちょっとうち、ほかのうちより高くしてあったみたいですね。でも結局、お義母さんのお部屋、和室なんですけど、もう畳がぷかんと浮いて、床上浸水。

「もう、水来てるよー。」とか言って、どうしようとか言っててんけど、もうしゃあないやんみたいな。子どもを抱きかかえて逃げられるわけじゃないんで、もう、逃げようがない。床下収納からぼこぼこ、ぼこぼこ水は出てくるし、トイレはもう水であふれてるし、おふろ場も排水溝から全部、水が上がってきてるから。

お義母さんは、自分の部屋にいてはりました。もう年寄りなんで 2 階には上がれない。本人がもういいわ、と。もう、そのときはどうしていいかわからない。わたしの頭の中もパニック状態。1 人で子どもも守らないといけないし、物も上げないといけないしとかいうのがあったから、うわー、どうしたらいいのよって。何回も電話、だんなに電話したけど、通じない。やっと通じたと思ったら、「どうしたらいいのー、電気も消えとうねんけど。」とか言って、「ブレーカー上げてみろ。」とか。結局はブレーカーを上げず、そのままあきらめて、もう水も大分引いてたんで、もう寝ようって。

ご近所での声かけとか、避難勧告とかはなかったです。広報車は走ったとかいってたけど、全然、何も聞こえない。で、御近所さんもみんな、避難されてないし。近所づきあいはとくにないです。ふだんは、回覧板のやりとりとか、それで顔を合わしたらこんにちはとかって言う程度で、後は全然。だから、全部自分で判断しました。

夫は自分のことを気ままにする方で、子どもの世話とかする方じゃないです。手が出るときもある。だから、子どももあまりなついていない。お給料も全額は入れてくれないので、いくらもらっているか知らないんです。水害のときみたいに、何かあれば消防で出てしまうし。子育てには全然ノータッチ。その方が、こっちとしてはストレスにならへんし、まあ、いいですけど。母子家庭やと思ってます。子どもは、ぜんそくがあるんです。たばこの煙もいけないのに、主人に言うけど、全然聞いてくれない。家の中でも吸うから、子どものことを全く考えてない。

お義母さんとも、いろいろちょっともめて。もう余りにももめてたから、とりあえずちょっと距離を取ろうということで、高齢者専用のワンルームマンションみたいなんに入られて。で、こけてケガして、入院しはったんですよ。水害の後片付けも大変で、入院のときは毎日お見舞い。退院して自宅に戻ってきて、しばらくは介護が必要な状態。大変でした。

市役所に相談しても相手にしてもらえない。夫の暴力でケガをして、診断書をとって。でも、お宅よりもっとひどいおうちもあるんですよって。それとももう離婚したら、みたいな。そんな簡単に離婚したらって言うけど、養育費がもらえるかどうかってこともあるし。すぐに市営住宅に入れるわけでもないし。そういうのもあったから、とりあえず少なくても、生活費もらえてるから、まあ今は我慢しているかんじです。

そんななかで、子育てサークルのお世話をしているのは、自分が参加して楽しかったから。同じようなお母さんたちとつながってたら、やっぱり安心する。ここに来たら相談できる。月 1 回が楽しみで。つぶしてしまうわけにもいかへんし、今のところ後継者はいないし。自分の子どもはもう小学生だけど、他のお母さんたちは、子どもが保育園に入ったら来なくなってしまうことが多い。今は、代表を替わってまではくれないにしても、手伝ってくれる人がいる。だからわたしも頑張ってやろか、と。参加してくれる人がたくさんいてくれるから、頑張ろうか、できるところまで、と思ってます。

ちっちゃな子たちの成長も見れて、すごく楽しい。苦痛とは思わないし、役所に出さないといけない書類とかもつくらないといけないけど、でも、その子どもたちの笑顔を見てたら、成長とかを見てたらやっぱし、してて楽しいかなって、別に、一つの息抜きみたいな。

水害のときは、後片付けが大変でした。子どもは家にいて面倒をみないといけないけど、親は片づけないといけないし。で、子どもをみてくれるボランティアさんとかいないですかと市役所に聞いたら、ボランティアはもう終わりましたって言われて。

確かに保健師さんも回ってはったんです。それは多分、独り暮らしのおうちとかかな。水害にあった乳幼児と障害者のいる家庭には来られなかったですよ。

いつ避難すればいいのかパニックになるので、言ってもらったら助かると思います。早めに教えてもらえたら、車も高いところに上げれるし、子どもも一緒に逃げれるし。23 号水害のあとも、何回か川が氾らんしそうなときがあったけど、そのときも広報車は回ってこ

なかったですよ。サイレンが鳴るんでね、もう、どうしたらいいんですかって、電話しました。携帯電話で、水位の上昇の程度を確認できるんです。それを見たりして。子どもを抱えて避難するのは、ほんとに難しいです。逃げるときにはたくさん荷物を持って出ないといけないでしょう、おむつミルク、哺乳びんとか、必需品。避難した場所に備えつけてあるとは期待できないし。だから、その水位の上昇が急激なときにもう早く逃げてくださいとか、避難勧告とか、そういうのが出れば、一応必需品も車に積んで、子どもも積んで、逃げられるやろうけど、と思います。

（2008 年 10 月 21 日）

〇I さん

うちは、2階建てのアパートの2階に住んでいました。1階部分は水に浸かってしまいました。あの日は、近所の親しい方（お友だちの家のおじいちゃん・おばあちゃん）が、自分の孫を保育園に迎えに行くので、上のお兄ちゃん（当時3歳）を一緒に連れて帰ってあげるわね、といってくれたのを覚えています。やっぱりうちは、下にふたごがいる（当時1歳）ので、雨の中大変でしょう、ということで。いつも4時半だけど、ちょっと早目に迎えに行ったのかな。で、そうですね、すごい嵐になってきて。

23号の前にもう一つ何かすごい台風が来てて、そのときに、家の外の手すりにかけておいた傘が風にあおられて飛んでしまったんですねで、近所の人が「傘下に落ちてるで」と教えてくれた。このときより大変なら、うわぁ、すごいのが来るなと言って、下に置いていた自転車も2階に上げました。上げててよかったんです、子供用の自転車。上げてなかったら、もう。

近所のお父さんたちがいつもより早く帰宅されたんですね。それで、電話かメールかで、台風大きいのが来るみたいだから、お父さんも早う帰ってきたらって言ったのを覚えてますね。父さんが6時過ぎに帰ってきた時点で、「もうちょっとおかしいぞ」って言って、「何か下がもう（水に）ついとる、べちょべちょになりつつある」と言って。住んでたアパートが、道から下がったところにあって、だから余計と早くあふれたと思うんですけど。近くに川もあったんだけど、川からはまだ来てなかったですね。

水はけはもう全然できてなかったから、ちょっといつもと違うぞと言って、外見たらもう、うわぁすごい川みたいだなって言って、じゃあ車を移動するわって、父さんが行ってくれて、自営なんですけど、近くに会社があったんで、そっちの高い方に持って行くわって言って。

もうそこからはすごい早かったと思いますよ。7時か8時か、なんかそのぐらいになって、だんだん水が上がってきて。父さんが帰ってくるときに、近所の家の横から腰の下くらいまで浸かって、ジャブジャブ帰ってきた。今回インタビューを受けるので夫婦で話してたんですが、腰の下まで浸かってたのを私覚えているわって父さんに言うと、父さんは「だって、いつも通ってくる道はもう水で通れない」って言って。なんか近所の家のすき間を通って、ジャボンと降りて帰ってきてましたね。

結局、会社は床上浸水になっちゃってたんですけど、会社の車は水に浸かって、家のは大丈夫だった。会社の車は全部浸かっとったのに、家のはどこに置いとったんって聞いたら、同じような感じだけど、やっぱりちょっとの差で、たまたま大丈夫だったんです。それでほんとこのまちの地形がわかったような、23号で。

家の中にいたら、窓を締め切っているからそうわからないんですけど、ニュースを見てると、もうすごい。8時、9時ぐらいかな、当時私、すごいビデオ撮るのが好きで、どんな様子かちょっと撮ろうと思ったんか、様子を見ようと思ってドアをあけたら、階段上がったところに、ちょっとの荷物と下の階のおばあちゃんが座っとんなって。へぇーって下見たら、もうどんどん水が出てきて、その時点で勧告とか何か放送入っとったんだけど、おばあちゃんとこも気がついて、さあ逃げようと思ったら、もう出れる状態じゃなかった。足が悪いし、もう出れる状態じゃないと思って、「ここにちょっとだけおらしてくださいな」

って。「もうそんな早う家に入ってください、どうぞ」って言って。
アパートは全部で4棟あって、どんどん電気が消えていくんですよ。隣の人も避難しなって、お父さんどうする？って言って。父さんは車を動かしに行った後で「もうしやあない、今さらこんな小さいの2人、3人おるのに、うちは動けれへん！絶対2階まで水が来ることはない！！」って判断して。それと、すごく仲良かった、保育園送り迎えしてくれたおじいちゃん、おばあちゃんのところに連絡した。そこはずっと昔から住んではって、私らなんかは引っ越してきたもんだから、様子がわからないでしょう。「こんな台風今まであったん」ってきいたら、「初めてだ」って。「もし一軒家のみなさんが逃げなるんだったら、うちも逃げるで、そのときは連絡して」って。周り、1階は全部避難しておいでになるし、だんだんと2階も電気が消えていくんですよ。ちっちゃい子らもばあっと行くのに、隣の夫婦、お子さんおられない方だけがおんなるかなと思ったら、そこも避難され出しなって、もうすごく不安になったんだけど、唯一そのおじいちゃんおばあちゃんの家が目の前だったんで、そこからの電話があったら、うちも逃げようと思ってたんです。結局、「うちはおる」って言いなったから、「じゃあうちもおるわ」って言って。そこのおうちは、ぎりぎり大丈夫だったかな。「伊勢湾台風よりすごいし」って、おばあちゃんが。
防災無線が各家庭に配られとったんですけど、もうそんな勧告とか、指示とか、今でこそわかるけど、当時そんなんわからない。そこまで押し迫ったことじゃないと思ってて、やばいなと思った時点でもう腰あたりになってるし、出れない状態だったんで、本当に人ごとのように思ってました。最後の方は、サイレンばっかりとかで、もう切っていました。唯一ラジオをつけながら寝て、そしたら何かどっかの堤防が切れたって。「お父さん切れたらしいでえ」って言って。
20日の7時くらいかなぁ、停電して、次の日の夜もまだ停電でしたねえ。ロウソクとかもなくて。2日後に水が一気に引くんですね、またそれが。下の階のおばあちゃんは1日いてお帰りになった。その後、身内が、おむつとかを福知山から何が要る？って言って、ポリの容器とか、おむつとかを持って来てくれてましたね。主人の方の実家のあるあたりも、すごかったんですよ。会社の倉庫があるんですけど、倉庫は吹っ飛んじゃって。そのあたりはよう浸かるから、もう堤防沿いに家が並んでいるんで、堤防高いんですが、それが越えちゃってるから、民家の方まで来た。自分らも会社の方に逃げてきたんだって言って。それで、うちは停電だというと、ロウソクとかを持ってきてくれてましたね。
今考えたら、心配だったのは粉ミルクですね。2缶ぐらい買い置きはしてたんですけど、それがどこまで続くか、外にいつ出れるかという不安がありました。そしていざ外に出れて買い出しに行っても、全然なかったですね。浸かっちゃったとかで。後で聞いたら、公民館とかにはあったんだけど、でもそんな情報も全然なかったんでね。
「とにかくこんな子3人連れては逃げれんわな」って言って。「おろう」ってお父さんが。「うちは大丈夫だ、2階まで来ることはないだろう」って言って、階段の3分の1の高さぐらいまでは水が来てましたけど。
あっという間にだんだんと水がふえてくるし、いつ逃げたらいいかわからない。逃げるとしても、その場所も当時頭に入ってなかったんかなあ。電気も消えちゃうし、携帯電話も電池がなくなって、実家からもメールが入るんだけど、だんだんと電池が切れて。それから買いましたね、手動式の充電器。当時、みんなそろえましたけどね、おむつとかもね

え。この間見たら、もう古うなってましたね。今の子には全然入らんわっていうような。

台風の後のことですけど、うちは大丈夫だったでしょう。会社が床上浸水だったから、後片付けを1日。何かねえ、じっとしているのもねえ。子どもらがおるから、そんなんできっこないって言われても、すごいいろんな情報が、困っとんなる、困っとんなるというのを聞いたんで、子どもを3人、実家に預けに行って。それで会社を1日手伝いに行って、それでも何かじっとしておれずに、ボランティア登録に行って、友達と一緒に。ニュースでね、「もうすごい人手が足りなくて、人手が足りなくて」って言っとんなって、「よし私らあそこに行かなあかん」と思って、友達と。そしたら「幼稚園に行きなさい」って言われて。20人ぐらいでガァーと行って、確かに幼稚園の床も水で膨れ上がってて、次何するん、次何するん、次何したらいいんだろうって言ってて、やることがなくなってきて、もう私ら要らんのん違うん。それより私たちはもっと困ってるところに行ったほうがいいんちゃうの？って、思ってたんですよ。

そしたら、何日間かしてから、お兄ちゃんの保育所が登園できるようになって、連れて行ったら、すごっい元気でうれしげに遊んでいるんですよ。それをみて、やっぱり私らが手伝いに行った幼稚園をおろそかにしていたら、子供らが遊べない状態だったんだなー、ああ、やっぱり幼稚園をきれいにしてあげてよかったんだわって。

家で面倒みれるようにも思うんだけど、子どもだってやっぱりストレスもたまっているんだし。幼稚園や保育所に行ったらガァーって遊べるのに、そういうときに限って使えないということは、余計とストレスをためてる。ああ、早う幼稚園とかをきれいにしてやってよかったんだなあって思いましたねえ。

（2008 年 10 月 21 日）

〇J さん

とりあえずすごい雨と風で。3時ぐらいかなあ、もう警報が出たんで、夫が会社から「もう帰りなさい」ということで、帰ってきて。近くなんで3時か3時半かくらいに帰ってきたんです。私はちょうど、隣町の実家に子供連れて行ってて。旦那さんから「今から帰るわ」って携帯に連絡があったもんで、「ほな私も帰るわ」って言ったのが、運のつきで、そこで帰ってなかったら、もう実家泊まりになっちゃうとこだったぐらい。ぎりぎり帰れた感じ。途中、よく浸かる道が、川の水があふれ出かけて、もうそろそろこれ通行止めかなみたいな、ぎりぎりで家に帰れたんですけど。その道がよくつかるというのは知ってはいても、でも、まさかと思って。それが15キロ離れている実家と家の間ぐらいだったんですけど、ぎりぎり通れた感じで、突破できて。

旦那さん帰ってきて、男の人はもう夕方何時かなあ、5時とか6時ぐらいには、防災無線で放送がかかって、消防団とか、出れる男の人は、土のう積みに出てください、と。うちの夫は当時もう消防団員ではなかったんですけど、土のうを積みに出かけちゃって。もうみんな協力して出てくださいっていうことで、出て行かれて、まずその時点でもうパニックなんです。

うち、家の前が結構な川で、家の真ん前に橋があるんです。台風の前の年に補強したとこなんですけど、そこの川は今まであふれ出たことがないって聞いてたので。うちもそこに家を建てて住み始めて、6年ぐらいだったんですけど、ここは川の水はあふれることはないって聞いてたもので。もうあふれそうだなっていうとき、すごい茶色い水で、すごい勢いでごみとかも流れてくるんですけど、それでもここの川はあふれたことがないから大丈夫と思い続けて。夫がいない間に子供と4人で夕方だったんですけど、この時期なんで、もう夕方5時、6時って言ったら、大分暗くなってくる。懐中電灯で家から照らしながら、まだまだ大丈夫、まだ大丈夫って思ってたんですけど。

ちょうど川のカーブのところで、えぐれやすいところに家があるんです。えぐれかけたことがあるというのを聞いたことがあったもんで、もう1人で子供と大パニックで。これ、もし水浸しになったら、私は1歳2人と3歳1人と、だれを連れて逃げるみたいな不安がずっとあって。なんかこれはいつもの状態とは違うなと思って、急いで早炊きで御飯を炊いて、おにぎりして逃げなあかんわと思って、おにぎりしながら、もう動揺してるとね、何か行動がおかしいんです。おにぎりつくらんなんけど、川を見ないといけないみたいな感じで。子供は3人普通の生活してるし。

どうしよう、どうしようと思って7時ぐらいかなあ、夫に電話しようとしたんです。ちょっとこれは前の川の様子がおかしいと思って。これあふれたら、1人で子供2人は連れて逃げれるけど、1人で3人は無理だと思って、ほかの消防団員の人とかには悪いんやけど、帰ってきてほしいって電話しようと思ったんです。けど、もうその時点では電話が混線状態で、何回かけてもつながらなくて。10分、20分ずっとかけ続けてやっとつながって、そっちはどうかわからへんけど、とりあえず帰ってきてって言って、帰ってきてもらえて。そのときもすごい雨、雨と風で。ちょっとこれはおかしいで、どうしようということになって。

防災無線って、そのころついてたんですけど、緊急事態の放送は当時、まだまだ全然細

かく放送されなくて。うちの家の前の川が氾濫しそうだっていうことを、私も近所の人とかに伝えてあげた方がいいなと思ったんですけど。裏の家の人は全然見えないんでね、川が。これをどうやって伝えるんだろうと思ったんやけど、そんなことより自分が逃げることが精いっぱいで。うちは道並みの高さなんで、道が削られて家が倒されるっていう恐怖はあったんですけど、浸水する心配はなかったんです。でも、うちの裏の方は全部低い位置なので。うちは浸水は大丈夫だけど、ここの家の人はどうなるんかなみたいな心配もあったんですけど、一切もう連絡できずに。とりあえずみんなに知らせることもできずに。

公民館か小学校か近くにあるホテルか、どっかに避難してくださいって放送されたんです。うちの夫が帰ってきたころだったかなあ、公民館は裏の低いところにあるんで、もう既に浸かりそうだということで。1階建てだし2階がない。あっこれはだめだなと思って、小学校に行くよりはホテルに行った方が寝具、布団とか毛布もあるし、食べ物も充実してるだろうと思って。勝手な判断で、小学校よりはホテルに逃げようと思って、7時半かなあ、すごい雨の中を、そのまた避難する荷物がすごい大変で、おむつどんだけ持って逃げようと思って、上の子も3歳5カ月なんだけど、おむつがとれてなかったんで、3人分、これいつまでの、何日分、とりあえず一晩かなと思ったんですけど、50枚ぐらい入ったのを1パックぐらい持って、とりあえず人数分の毛布、もしも車の中でどないか出れれへんようになったらあかんと思って、人数分の毛布と子供はおねしょするかわからへんし、漏れたりしたら服汚れるしと思って、子供の着替えをすごい枚数、たくさん持って、おにぎりも何とかつくれて、それも何かすごいこと、何合炊いたか忘れたんですけど、とりあえずおにぎりもいっぱい持って、とりあえず何かあるもの持っていかなあかんと思ったんで、お菓子、お菓子でもええかと思って、お菓子もいっぱい持って、どこに泊まりに行くんだってみたいぐらい、すごい荷物を持って、私の軽自動車で避難しました。

あとで聞くと、ぎりぎり逃げれたみたいで。消防団も三世代同居の人に優先に入ってもらってて、奥さんと子供はおじいちゃん、おばあちゃんが一緒に家にいてくれるというのがある。うちは同居してないんで、帰ってきてって頼んだことは仕方がないかなと思いながら、でもみなさん危険ななか活動してくださってる、と心を痛めながら逃げたんです。私らが逃げてすぐ後に、橋げたに山から流れてきた木が土砂崩れで、土砂も木もすっごい流れてきちゃってて。うちの家の方や向こうの村の方にずっとあふれてたらしくて。

ホテルの1階に結婚式の披露宴会場みたいな広いところがあるんで、とりあえずそこに、近所の人とか避難してたんですけど、うちのとこから流れ出した雨がずっとホテルの方にも来て、みるみる1階には雨が入ってきて、2階に逃げてくださいって言われたんです。夫はちょうど車に荷物を取りに行ってるとこだったんで、1人ですごい荷物を持って3人の子供を2階に上げるのがすごい大変で、それが全然知らない人がだっこして連れて上がってくれたりしたんですけど、でも2階上がったらもう停電にもなっちゃって、真っ暗で。1人で3人の子を避難場所に連れて行って、静かにさせられるかってというのが不安で。そのうちに夫も車から荷物取って、帰ってきてくれて、2階にはいたんですど。その外に置いている車も浸かっちゃって、パアになっちゃったんですけど。

家の方は結局、縁側っていうか、縁側のサッシの枠からどんどん水が入っちゃって、泥と水が上がって。余りにも長い間、その水が腰の高さぐらいまであったらしくて、そこには泥は入ってきたんですけど。

何が大変だったかな。夜、人がたくさん避難している場所に、とっても楽しい場じゃないんだけど、子供は人がいっぱいでテンション上がっちゃう。うちはまだましなんですけど、床上浸水で悲しい人とか、もう今にも産まれそうな妊婦さんとか、そういう人がいる中で自分自身の気持ちも沈むんですけど、もっと大変な人がいる中で、子供のテンションを上げさせないように、落ちつかせるのが、大変でした。人前なんで、そうそう怒れないですしねえ。でも子供もなんか雰囲気を察してるみたいで、思ったよりは静かだったんです。お菓子食べたり、おにぎり食べたり。ホテルの方が飲み物は飲み放題で何でも飲んでくださいって出してはくださったんですけど、停電なんで、トイレも真っ暗で、水も流れない感じやしねえ。携帯電話で照らしながらトイレにいきました。携帯もしっかり充電して出ているわけじゃないんで、切れそうになってくるし、でもどっこもね、混線してるんでね、電話は通じないですし、なかなか。

避難のタイミングについては、お隣さんとどうする、って話はしました。お隣さんは、何か親戚だかに行くわっていうことやって、うちもどうしよう、とは思うものの、なぜか「大丈夫だろう」っていう気があったんで、そんな避難するっていう考えはぎりぎりまでなかったんです。防災無線は、避難場所の案内をしてました。避難のタイミングについてはわからない。

後でよく考えたら、うちの近くで避難しているのは、やっぱり川沿い。裏の人は逃げようと思ったときには、逃げれなかったというか、もう水が来てて。ただ、この裏の家の人は浸水はしても、流される心配はないやろなという感じで、2階にあがるだけでいい。うちはえぐられて、家が流されちゃうかなっていうイメージがあって逃げたんですけど。裏の方の家の人のおうちに、行かせてもらったらよかったんかなと、後で思いました。ただ、避難場所、避難場所ってパニック状態のときに言われると、何か避難場所に行っちゃう。

裏の人たちは避難してなかったんだけど、何か後で考えたら、かえって避難してない方がよかったと言われるんです。やっぱり避難場所に行くと、不自由が多くて、子供連れてると人に迷惑をかけるとか、トイレ一つ行くにも、下の子をちょっと見とってもらえますか、って言わんならんしねえ、真っ暗な中で。

とにかく、ちっちゃい子を複数人数連れてるっていうのが、パニックというか。子供1人、2人ぐらいだったら、水の中、抱えてでも連れて逃げられるっていうのがあったんですけど。3人いて、だれを置いて行こうみたいな。本当にそこまでのぎりぎりの時点では、ねえ。避難するにしても、自宅にとどまるにしても、子供が小さいということがパニックというか、判断の感覚を麻痺させるっていうんですか。

みんな逃げ遅れというのが多くて、逃げ遅れても助かってるのがほとんどなんですけど、ホテルに避難しているとき、この前の方で畳ごとおばあさんが浮いてしまっています、助けに行ってくださいって呼びかけがあったんです。うちの夫も行こうかなと言ったんだけど、そっちも大事だけど、私もとにかくいてほしいって言って。ほかにも男手があったので、頼んで。ただ、ぎりぎりの選択をした罪悪感。ちっちゃい子が少なかったら何とかなるものを。これをどうするん、私1人でと思って。その辺の気持ちがすごい後々つらかったです。自分の被害だけではなくて、そういう部分もしんどい。

防災無線はきっちり聞きます。でも、犬の迷子がありますとか、平和なとこなんですけど。

水害から2年ぐらいは、子供の服とかおむつとか、最低限要るものをかばんに入れて、いつでも逃げれるように準備してました。子供の分はちょっと大き目の服とかを全員分詰めといて、いつでも逃げれるようにと。水も準備して、お菓子は常に家にたくさん置くように。やっぱりお菓子って、ふだんは余り食べさせないように気をつけているんですけど、ああいうときは便利で、もうこれ助かったと思います。もう去年くらいからはもうちょっと気が抜けちゃって、一回来たとこは大丈夫だろうっていう感覚があって、すごい油断しちゃってます。

何が一番大変だったかというと、後片付けが大変でした。避難のとき、すごい雨の中を3人連れて、荷物を車に乗せて、またそれを着いてから出したりおろしたり、そのことも大変でしたけど、その後の処理。次の日家に帰ったら、土がえぐられて、裏の畑とか家の方にバァーと流されちゃって、下水の排水管とかも出てきてて、スギとかヒノキとかが家の前にボーンと持たれかかってたり、うちの車にゴーンってぶつかってたり、こういう枝とか葉っぱとかもぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ家に当たってたり、挟まってたり。

それと床下浸水だったんで、その床を上げて、下を乾かしたりとか、泥を取ったりするときに、3人の子供を連れてたら仕事ができない。ほんとに作業が進まないんで、子供がいると。んで、それを15キロ離れたわたしの実家の母親に預けるんです。寝泊まりもそっちでしてたんですけど、途中の主要道路がもう全く通れなくて、すごく遠回りをしないといけないんで、その行き帰りだけでも時間取られて。もう母親は、3人の子守で疲れ切ってますし。片づけがすごい大変でした。

そういうときぐらい預けられるところがあったらよかったんですけど、地域にある保育園2つのうち、1つはもう浸かっちゃってて。夫の実家は、自宅から10キロぐらい離れたところにあるんですけど、それがまた山の上で。そっちはそっちでまた土砂崩れでしばらく行けなかったんですけど。夫の両親はもう高齢なんで、育児とか頼める感じではないんです。周りがみんな被災されてる方が多いんで、なんか周りにも頼みにくいっていうか、親以外の近所の人とかも。

（2008 年 10 月 31 日）

OK さん

台風のときはちょうど、だんなの実家が阪神間にあるんですけど、2 泊 3 日で家族全員で帰省してたんです。3 日目、自宅に帰る日に、「きょうは多分、台風くるから早く帰り」って天気予報を見たおばあちゃん（引用者注：夫の母）に言われて、いつもなら夕方ぐらいまでいるんですけど、お昼過ぎぐらいに実家を出たんです。

途中からやっぱり雨風が結構強くなって、急いで帰らな、と思いました。高速は一応、福知山までは通れたんです。福知山 IC から下りると、ほんと川がすごい増水してて、見る見るうちに道まであふれてきてました。

福知山 IC から帰るルートはいくつかあるんです。一番大きな道を通ろうと思ったけど、渋滞してて。途中からみんな U ターンして帰ってくるんですね。なにかと思ったら、道路に大きな木が倒れてて通れない。道路もそのときに冠水してて、車のタイヤが半分隠れるぐらいでした。これは怖いわと思い、そのまま引き返して、別のルートも試すんですけど、やっぱりがけ崩れか何かが起きてて。もう、山道、峠を通らないと帰れない状況だったんで、どうしようかと。もう本当に 3、4 時間ぐらいうろうろうろしてて。夕方 5 時 6 時で真っ暗になってくるし、赤ちゃん 2 人連れてて、そろそろミルクの時間もあるし、仕方がないからビジネスホテルにでも泊まろうかとか言って。でも、そこもいっぱいだったんですね。

でも幸いね、大雨の中で、2 人ともずっと寝てたんです。それが大泣きやったらこっちもパニックになってたかもしれないんですけど、でも本当にすごい寝てくれてたから、まだよかった。暗くなってくると、起きてきてギャーギャーギャー言い出してきたから、これはあかんわと言って、やっぱり寝かせなあかんと思って。結局、福知山市内のファッションホテルみたいなとこに、もうそこしかあいてなかったから、とりあえずそこに入って。8 時か 9 時ぐらいになってた。あっちこっち探したけどなかなかなくって。

そこに泊まって、同居しているわたしの両親に電話するんですけど、全然つながらなくって。テレビとか見てると、川がはんらんしたとかニューステロップが流れて、どうなんやろと思って。結局その日は、1 回だけ連絡がとれて、ホテルに泊まるということだけは言えたと思うんですよ。

次の日は、いつもと違うところだから子どもたちも早く起きちゃって。5 時か 6 時、明け方ぐらいにね。こっちもじっとしてられないから、早く行こうって言って。子どもたちがミルクだったし、たまたま帰省の荷物があって、おむつとか哺乳瓶とかも一応一通り、全部、着がえとかもそろってた。すごいそれは助かったなと。ホテルのフロントで「すみませんお湯ください。」そういうとこだけど、非常事態だから多分わかってくれてはったと思うんですけどね。ミルクのお湯もらって、ミルク飲ませて、5 時ぐらいにそこを出てました。朝明るくなると、まちなかもすごいんですね。水は、大分引いてはいたんですが、木が転がってたり、嵐の後みたいでゴミや木がすごかったです。結局は帰れないってテレビのニュースでわかったので、丹波市内の知り合いにとこにとりあえず行こうと思いました。「今から行かせてもらっていいですか、子どもがいるから」とか電話して。主人は仕事に行く必要があったんですよ。お世話になった知り合いは、夫の同僚の方なんです。すごい仲よくしてもらってて、奥さんどうしでみんな遊びましょみたいな感じの仲で、すごい

気さくな方です。だから事情を説明したら、おいでおいでみたいな感じ。その方に子どものお風呂入れてもらったりしてね。

両親に電話すると、えらいことになってると、帰ってこれんでいう感じ。うちの家の前まで水があるとのことでした。道ぎりぎりまで水が来てた。いうなら、自宅からもうどこにも出られない。平野が水浸しの状態。帰れんで、という話になって、どうしようって。その日の夜はだんなが泊まりの勤務だったんですよね。だから、もう仕方ないし、知り合いのお家に一晩泊めさせてもらって、奥さんに子どもたちを見ててもらって、私はおむつを買いに行ったりしました。次の日に、やっぱり帰れる状態じゃないし、帰ってもすごい汚いから、1 週間くらい、夫の実家に行こうと言って、だんなが迎えに来てくれて、そっからまた U ターンして。結局、夫の実家に十日近くいました。自宅に戻ってきたのは、ある程度片づけられてから。早く帰りたいと思いました。

ほんとすごい雨の中を車で通ってたから、すごい怖かったですよ。川と道路の差がなく、ほんとそばに川があるんですよね。境目がわからなくて、もう道が見えへんからその中を U ターンしないといけない。こわいこわいこわいと言いながら。運転は皆だんな任せやったけど。すごい怖い。その中でも、子どもたちは寝てくれてたからよかったんですけど。だんながいなくて、1 人やったらどんでもない、もうどうしようって感じですよね。泊まることも頭には浮かばへんし、とにかくやっぱり、足広げて寝れたのはよかったです。そのときは何にも思い浮かばなかったんですけど、今思い返して見ると、夫がいてくれたからこそ、そうやってホテルとかも泊まれたし、私一人だったらそこまで頭回らないし。下手したら車の中でずっと過ごさなきゃいけなかったですよね。

子どもたちは、覚えてないと思うんで、その影響かどうかわからないけど、ドライブスルー洗車機って、割に子どもに人気があるみたいなんです。でもね、うちの子たちすごい嫌なんですよ。もしかしたら暴風雨の中をとおったことが、赤ちゃんなりにわかってたのかな。雨の中寝てたけど、すごい、とにかく大泣き。この世にこれほど嫌いなものはない、ぐらいにすごい泣くのよ。それも 1 歳、2 歳ぐらいのころからずっと。今でも嫌なんですよね、洗車機。車洗いに行くでって、「嫌だ」降りて待っとくとか、外で見て待っとくとか。

私は水浸しになったという風景は見てない、テレビとかでしか見てないんです。家の周りがテレビに映って、すごい、とか。でもやっぱり雨の中車で走って、どこも帰れなかった。それが、わたしの水害の体験です。

被災地における家族の合意形成とそのフォローアップについて

調査研究報告書

◆発行　　(財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
共生社会づくり政策研究群

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2　ひと未来館 6 階
TEL：078-262-5579　　FAX：078-262-5593
http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/index.html

平成 21 年 3 月